
戦乱学級 ~ヴェリーペア戦記~

初緑

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

戦乱学級 ～ヴェリーペア戦記～

【Nコード】

N0161Y

【作者名】

初緑

【あらすじ】

大学受験を控えた3・3の生徒達は、始業式の日、見知らぬ世界に迷い込んでしまう。そこは人々が甲冑をまとい、剣を手にした、それまで親しんできた日常とかけ離れた場所だった。なぜこんなところに来てしまったのか、どうすれば元の世界に帰ることができるのか。ちょうど始まった大戦乱の中、彼らは否応なく戦いに巻き込まれていく。／／【注意】血などの描写が結構あります

松風涼一は走っている。

すでに足の筋肉は悲鳴を上げていて、腕を振る気力も萎えつつある。

見知らぬ山奥で、道なき木々の隙間を、顔中にひっかき傷を作りながら、それでも走っている。

追っ手は迫っていた。男が三人だ。理由はわからないが、混乱する中で聞き取れた「殺せ」という言葉が彼を突き動かしている。

……どうしてこんなことに！

膝ほどもある草を蹴りながら、今まで何の疑いもなく抱いていた自信が崩れていくのを感じる。

陸上部のホープ。短距離のエース。日本一。

悪路ではこんなものだ。薄汚れた男たちを引き離すこともできやしない。

息切れも間近だった。ペースコントロールなどしていたらあつという間に追いつかれていただろうから全力疾走しかなかった。おかげであと数秒で足が動かなくなる。

そして……殺されてしまう。今朝まではニュースの向こう側だった事態が、しかし今の涼一にはひどく生々しい。

あの男たちは自分を殺す。間違いない。ちらりと見えた刃物は、護身用というにはあまりにも巨大で、使い込まれていて、禍々しか

った。不良だのヤクザだの、そんなレベルを遙かに超えた暴力の臭いをまとっていた。

まるで……まるで、そうだ。山賊のような……

ふと、足が宙を踏んだ。

「っ！？」

急に眼前に広がった景色が、彼を絶望させた。あまりにも広大な森。おそらくこの山からずっと続いているのだろう。その向こうにそびえ立つ巨大な山が、左手に広がる湖が一気に視界へ飛び込んできた。

前のめりに倒れながら、涼一は目を疑う。

山を挟むようにして浮かぶ二つの太陽。

その意味を深く考えるまもなく、彼は崖を転がり落ちた。

戦乱学級

始業式が終わった。

小学校、中学校、そして高校、一年で三回ずつ繰り返されてきた行事。

三年生の彼にしてみれば、一月の始業式は人生で最後の始業式であるはずだった。進学予定の大学にはないと聞いている。

始業式にいつも心躍るのは、久しぶりに級友と会えるからだろうか。それとも、退屈だった朝から晩までの塾通いから解放されるからだろうか。とにかくすぐにセンター試験がある。浮かれてばかりはいられない。

「松風、陸上の推薦でいいところ行けたんでしょ？ もったいない」

講堂から教室へ戻る道すがら、藤堂美子に話しかけられた。

「あたしだったら絶対飛びつくのになあ」

「いや、まあ、俺もそうは思ってただけだ。家庭のジジョーだよ家庭の」

実際はそこまで重い事情でもないし、推薦可能枠になんともなく満足いく大学がなかったただけの話ではある。というより、藤堂美子も弓道部でそれなりの成績を残していたはずだが。

「ダメダメ、全国で優勝しなきゃ。それにあたし、弓道は高校までだし」

ひらひらと手を振る美子は、ぴったり全国平均身長の涼一から頭一つ低い。

「彼氏でできなかったもんなあ。やってる間は楽しかったけど、その結果があれじゃ、どんと後悔」

「彼氏、できなかつた？ 越知はどうした」
「ダメだよ松風君、それ禁句」

後ろから背中を叩かれた。久住栄一、涼一の後ろの席の、確か帰宅部だ。

見れば美子はむつつりフクレている。

「越知君、あんな人でしょ」

と言われ、想像するだにたやすい。なるほど、美子も勘違いしてしまった生徒の一人であった。だが一時期の越知は、涼一から見てもそう思えるほどにアプローチが激しかったはずだった。まさかあれが素か。

「うおおい、松風ツチ！ ちょっとちよつと！」

この声は噂をすればなんとやらだ。クラスメートをかき分けて越知知治が逆行してきた。

「おまえ、なんか用があるなら教室でいいだろ」

「いけねえよ忘れちまうもん俺。ほれ、これ！ いいか、誰にも見られないように開けるよ」

ノートの切れ端を押しつけてくる。軽いノリと端正なマスクで騙した女生徒は手足の指ではきかない。さらにバスケットもなれば誰も放ってはおかないだろう。

美子への仕打ちと似たようなことを三年も続けて、未だに被害者が絶えないのだから相当のものだった。

「おお、美子ちゃんじゃないの。髪の毛おろしたの？」

次の瞬間、張り手がとんだ。

「越知が悪い」との全会一致を得て、美子の暴力は不問に。涼一らは、もうほとんど来ることのなくなる教室へと戻る。

これから短いホームルームがあって、後は帰るなり塾へ行くなり、教室で自習してもよい。一応進学校であるから、たいていは塾に行くか、自習するかだ。

窓際の自席に座った涼一は、先ほどねじ込まれたメモに目を通した。普段越知知治とはあまり交流がなく、したがって基本的にはお互いに用もない。

十二時に屋上

「おお、なんスかそれ」

前の席から、小橋絵里が振り向く。なにを感じ取ったのやら、とにかく何かにつけ臭いをかき取ることに長けている女子だ。だてにメガネではない。

「見てわかるだろ。呼び出したらよ呼び出し」

「これは男の字……というより、越知サンの字ですね」

恐ろしい女だった。

「まさか、越知サンが今まで特定の女子をパートナーにしなかった

のつて……」

「やめるバカ、寒気がする」

「お、越知君が松風君を!？」

隣で悲鳴を上げたのが佐伯いつなである。机を挟んで藤堂美子と進路について話していたはずだった。その美子は苦い顔をしている。

「ダメだよ！　そ、そんな不潔なこと！」

「こら、本気にしたじゃないか」

ため息をつきながら涼一。暇だからいいが、すごくウザい。

「まあまあ。男同士だから不潔って考えには賛成できませんね、いつな」

「違えだろそこは！」

それで被害が増えなくなるならいいけど、と毒づく美子を後目に、いつなはかなりシヨックを受けているようだった。隣の席になった初めはまともにも口をきかなかったほどウブな女子だ。そっち方面にも疎いというか、潔癖そうである。

「松風一、おい、松風！」

強烈な大声。顔は見えずとも一発でわかるのが炎条寺陽之の特徴であった。加えるなら、涼一と同じ陸上部だ。

「ホームルームのあと、いつかい部室集合な！　挨拶あるから！」

手を振って答える。

絵里がずいと身を乗り出してきた。

「で、行くんスか？」

「え？ いや、どうしよう」

なにか用があるなら教室で言えばいいのだ、と先ほど直接言った。わざわざ呼び出して内緒話をするような仲ではないし、呼び出してリンチするような仲でもない。

「襲われるかもしれないですよ。写真撮っていいですか」

心なしか、キラキラ目が輝いている。太陽がメガネに反射しているのだろうか。

「おまえ、変な趣味あるよな……」

越知を問いつめても「内緒だよナ・イ・シヨ」の一点張りで、ならば行かぬというところでも構わないとのことである。

「しかし行かぬは一生の恥と言うでしょ、松風っち。俺だったら行くね」

用件もわからずに恥がどうのと言われたくはない。

「どうした、松風。越知の言うことを真に受けてどうする」

美男美女の多いといわれる三年三組だが、男のトップは間違いな

く風間雷太である。女子のトップは、今は教室にいない柊雪子だというのが世間一般の噂である。ただし女子に関してはランキングがあまり一定しない。

その風間雷太、弁護士の親にあやかり有名私立大の法学部を受験するというインテリぶりだが、性格自体は一本気で正義感に溢れているため、男女問わず人気が高い。

にも関わらず浮ついた話がないのは、彼が幼なじみの式家麻尋にベタボレであるという公然の秘密による。なんと幼稚園の頃から片思い中であるというのだから恐れ入る。

本人は誰にも気づかれていないと思っっているようだが、麻尋本人ですら知っている。彼女は彼女ですつと雷太の告白を待っている状態で、実は両思いであることを知らないのは雷太だけという、聞いている方がイライラしてくる純な関係であった。

とりあえず今は関係ない。

「八割が嘘でできている奴だぞ」

「大事なのは残りの二割だけよ。信じる松風っち」

越知の口の回りっぷりにはある種の敬意を表す。そこまで秘密にしておきたい用事がなんなのかはさっぱりわからないが。

「そういえば松風」と雷太。「大学でも陸上はやるのか。推薦蹴つたんだろ」

涼一は曖昧に頷くと、そのつもりではある旨を伝える。

「まあ、プロ目指してるわけじゃないし。自分が一番になれそうなレベルのところに行く」

「朝から晩まで走ってたもんなあ松風っち。だから彼女とかできなかったんよ」

越知に言われると少しムカつく。部活と遊びを高レベルに両立する彼ほどに、涼一は器用ではなかった。

越知、雷太の二人から離れ、席に戻る。それと同時に担任が入ってきた。

級長栃木樹木の号令。

また一日がすぎてゆく。

とんでもない激痛で、うめくと同時に目が覚めた。開眼一番、自分が遙かな上空から転がり落ちたのだと思い出す。土の匂いが鼻をくすぐり、草木のすれる音が静かな森を占める。

起きあがるうにも、どこかに力を入れるとどこかが痛むという有様だった。いや、かすかにしか覚えていないが、死を覚悟するほどの高さだった。痛むだけマシと考えられないだろうか。

動きようがないので耳を澄ましていると、どうやら男たちは追いかけてこないようだった。もしかしたら迂回しているのかもしれないが、涼一がそこまで魅力的な獲物かと考えると可能性は低そうだ。

体が動かないついでに頭を動かす。ここがどこなのか、自分がどうしてこんなところにいるのか、自分はいかにしてこんなところにいるのか。

なぜなら、彼は学校の屋上にいたはずだからだ。

ほんの十数分前のことである。

都市部にある彼の母校には、当然こんな森も、山も、先ほど見えた湖などもない。だいいち、太陽は二つも存在しない。

追ってきた男たちのように屈強で薄汚れた人間は珍しいし、あんな刃渡りの長い凶器などそれこそあり得ない。見たことがない。

ないない尽くしで全く答えが出そうになく、ぐるぐると同じ考えが脳裏を走る。

学校の近くではない。

日本でもない。こんな絶景、あれば何かでお目にかかっていよさそうだ。

というより……見間違い出なければ太陽が二つ。

地球ですらない？

「バカか」

声に出して否定せねば、どうにも不安だった。

彼が十数分前にいた場所が地球であれば、そこからわずかな時間で地球以外のどこに移動してしまうというのだ。意味がわからない。しかしながら、今の涼一には、自分のおかれた異常事態を過不足なく説明することができない。

「あつっ……」

森の中は大部分が陰になっているとはいえ、蒸すような暑さだった。すくなくとも一月ではありえない。走っている間は気づかなかったが、詰め襟の内側が汗でびしょ濡れだ。気持ち悪い。

不快に感じながらも、四肢が動かせないのでは脱ぐこともできない。しかも最悪なことに、また意識がなくなりつつあった。やはりどこか頭を打ってしまったのか。強烈な眠気の中で、そういえば、と彼は思い出す。

秋月有希は無事だろうか。何事もなければよいが。

ホームルームも終わり、それぞれが思い思いに行動する中、涼一は荷物をまとめながら時計を見た。十時半。まだメモの時間には一時間半ある。先に部活に出てもよいだろう。どうせ彼ら三年生は最後の挨拶をするだけだ。

炎条寺陽之と女子陸上部の波田野由香里に声をかけて、彼らは教室を後にする。

「今日の挨拶な、キャプテンの望田のあと、全国優勝のおまえ、やるから」

相変わらずの大声で陽之。

「はあ？」

と、涼一は寝耳に水だ。

「当たり前だろ。てかおまえがやんなくてどうすんだよ」

「そーよお。ウチの子たち、松風君がなにもしなかったらブーイングだからね、きつと」

逃げ出したいがそうもいかない。

途中、宗久太郎と岸巻春子のカップルを冷やかし、水野冷子が颯爽と専門校舎に歩くのを見送る。おそらくいつも通り図書館だろう。

適当にスピーチして、後輩たちに寄せ書きなどもらい、どうにもこうにも、まだ卒業自体は先なのだから中途半端な気分である。今の時期にやっておかないと、入試に落ちた場合に素直に送別できないのだから仕方ないと言えはそうなのだけれど。

後輩と一緒に泣いている由香里ら女子を横目に、彼ら男子陸上部

はそこまで感慨深くもなくダベりあう。

「炎条寺、今何時？」

「あ？ ええと、十一時半だな」

声がデカい。その恐るべき肺活量は長距離に關しての強力な武器だったが、いかんせんペース配分がいつまでたってもうまくならなかったのが炎条寺陽之の高校陸上であった。

最初から全力、というのもまた彼らしくはある。最後まで全力で走ればこの上なく理想だったが。

「ちよつと出てくる」

「ああ、いーよ。つかもう解散でいいだろ。俺走ってこよ」

マジか。後輩を何人か連れてグラウンドに飛び出していく陽之。それを見送りながら、涼一は思わず苦笑した。走ることへのひたむきさにかけては及ぶべくもない。あとは努力の方向性さえあえば劇的に成績が延びるはずだった。

「ちよつと待って、松風君」

部室を出た涼一の元に、涙を拭いながら由香里が駆け寄ってくる。

「校舎に戻るなら、私も行く。運動着忘れちゃった」

「もしかして波田野も走る？」

「うん。大学までになまっちゃんいけないものね」

由香里は他の大部分の部員と同様、大学でも走るつもりのようにだった。

由香里と別れ、屋上への階段を上がる。校舎内は今までと比べて騒がしい。おそらく、これからは受験を迎える生徒たちの自習室として機能するのだろう。教室の中には数人の生徒……森部綱吉、寿奈津のガリベンコンビと、乱堂忍、余市隆弥、鳴島鳥夫のオタク連

中が何事か話していた。

十分前だったが、扉の前にはすでに越知がいた。キザったらしく指で挨拶すると、彼は涼一のために道をあける。

「邪魔が入っちゃ台無しだから。見張ってるの」
用があるのは越知ではなかったのか。

「俺あね、せつかくだからイイコトしようと思って」
そのイイコトが涼一を呼び出すことのようにある。意味不明だ。

扉を開けて屋上にでる。

今日は風が冷たい。暖冬と言われているが、夏に比べて寒いことにはかわりない。

抜けるような空の下、フェンスの前に、女子が立っていた。

同じクラスの秋月有希。

「げっ」

と心の中で思い、振り返る。越知がニヤニヤ笑いながら扉を閉めるところだった。

ハメられた。

秋月有希は……クラスの中でも比較のおとなしい部類に属す。

メインストリートの騒がしい女子の端っこに位置する、上位ではないが下位でもない、比較的無難な立場の目立たない生徒だった。涼一との接点は越知以上はない。

しかし、二人きりの場所に呼び出され、その用件に思案を巡らすほど彼は鈍感ではなかった。有希の思い詰めたような顔が痛々しい。

松風涼一、この手の空気は苦手だった。

有希は涼一に気がつくのと、哀れなほどに狼狽した。

「あつ」

とだけ。確かに何か言おうとしたが、それ以上が詰まって出ない様子だ。

かたや涼一は涼一で、なんと声をかけるべきか迷っている。「なんの用」とはストレートに過ぎるし、天気の話題はあまりにも不自然だった。クラスメイトが屋上で交わす挨拶ではない。

越知を呪いながら、しかし黙ってはいられない。一歩近づくと、有希の体が硬直するのが見て取れる。

「お、おす、秋月」

もはや涼一の頭も混乱しつつある。このような状況に放り込まれたのも初めてだから、丸く納める方法も知らない。

うまい具合になにか話題がないかと頭を空回りさせていると、

「あつ、あの、その」

と、声を押し出すように有希が話し出す。長い髪の毛が風で揺れているのを左手で押さえつけながら、

「私、松風君のことが……」

いきなり核心だった。

心の準備もできていなかった涼一が反射的に遮ろうとしたとき。

「す、」

確か、その後だ。

体が痙攣し、走り抜けた痛みにも悶絶する。

目を開ければ、先ほどとかわらず森の中だ。姿勢も変わっていない。仰向けに倒れ込んだまま、満身創痍のまま。

そう。

あの時、なにかが起こった。

涼一の両手が有希に触れるか触れないか、その瞬間に有希が消えた。

それどころか屋上も、町並みも、空もすべて消えて、気がつけば森の中だ。

そうだ。

わけもわからずさまよっている、急に男たちが現れて。

日本人とは思えぬ顔立ちと体格、そして傍目にも異常なボロに身をまとい、異形の刃物を持った男三人。

そいつらに追いかけて、今。

泣きたくなってきた。

「なんか、悪いことしたかよ」

しかしながら、泣いている訳にもいかなかった。

ギシギシと、まるでそれぞれのパーツが別物のような有様になってしまった体をどうにか動かし、とにかく起きあがる。どこか動かす度に全身が痛む。むしろこの痛みに涙が出そうだった。

あたりは静かだ。

転がり落ちてきた崖を見上げる。戻れそうにない急勾配だし、戻

る気も起きない。あの連中がまだいたら、今度こそ命がないだろう。

「殺される……ねえ」

そんな風を感じたことなど、これまで生きてきて一度もなかったはずなのに。

逃げている間はずっと確信していた。それを思い出して、今更ながら悪寒を覚える。

あまりにも痛かったので、移動する前に体を点検した。詰め襟とシャツを脱いだらかなり快適だ。幸い、骨折などの致命的なものはなく、ほとんどは打撲だった。あとは頬の擦り傷と本当に軽傷だ。崖は二十メートルほどもあることを考えると出来過ぎである。

上半身裸のまま歩き出す……どうせ誰も見ていない……まずは、ここがどこかを確かめねばなるまい。先ほど見た景色は夢か幻か、それとも現実なのか。考えるのはそれからだ。

森は鬱蒼としており、草むらやツタなどで非常に歩きづらかった。聞き慣れぬ鳥の声、獣の声が遠くに聞こえ、もしや熊など出やしないかと焦る。

崖を背にすれば、どれほど時間がかかるのかはわからないが、いつかは出られるはずだった。日はまだ高い。

「好き、です」

脇道いっさいなし、直球の告白。考えてみれば、秋月有希に変化球を求めるのは酷であるように思えた。

有希とは、確か一年から同じクラスだったはずだ。はずだ、というのは前述の通りで、ただ同じクラスだっただけだからだ。挨拶以上の会話に覚えがない。

さればこそ、なにも浮かばなかった。決して経験豊富ではない涼一である。中学のころ、ませた同級生とお遊びのようなきあいをしたのがそれで、休日にサッカーができなくなったのがイヤで一ヶ月で終わった。高校で陸上部に入ってからはずねに走っていたし、誰かに惚れるような余裕は持っていなかった。

その点でを補足すると、涼一は明らかに走ることに惚れていたと言える。走り続けたことは、全国で最も早く200メートルを駆け抜けた要因の一つであったらう。20秒77は歴代の覇者に比べても遜色ない。

だから、有希の放った四文字は、彼を混乱に陥れるには十分だった。加えて言えば、やっとのことで思いを告げた有希は顔を真っ赤にしてうつむいている。反則である。

なにか喋らなければならぬ。ではなにを？ なにを言えば、この恥ずかしくも気まずい状況をほぐすことができる？

涼一が困っていると、背後で机の崩れるような音がした。踊り場のあたりに積んでいたものが崩壊したのか知らないが、彼がそれに気を取られると、せきがきれたように有希がまくし立て始める。曰く、

「あ、あの。急にごめんね。でも、その、一年の頃からずっと走ってるのを見てて、えと、すごくかっこいいなって思ってたの。

最初は本当に、ただかつこいいなって。朝、私が登校する時間、いつもグラウンドで練習してたから、それ見てたの」

人にほめられるのはいつも恥ずかしい。だが今はそれよりも、この空気のフォローをさせてしまっていることの方が問題であるように思える。とはいってもやはり、なんと返答すればいいのか皆目見当つかぬ。

「私、運動とか苦手で、だから私にできないことをがんばってるのがすごくかつこよくて。走ることが大好きなんだろうなって、お話とかしたかったんだけど、私ってこんなものだから、男子とお話しながらできなかったし、松風君、いろんな人と仲良くて、私なんか地味だし、それで、だからずっと見てたのが、あれ、な、なんかストーカーみたい」

「いや」
と、思わず遮ってしまい、後悔する。しかし有希が自分を卑下するのは止めねばならないような気がしたのだ。話すのが苦手なのは彼も同じだった。

正直いって、自分のことを誰かが見ていたことなど気づきもしなかった。三年間ずっとだ。が、そういえばたまに藤堂が意味深なことを言っていた気がする。あなたのファンがいるとかなんとか。あのころは何のことかわからなかったが、もしかすると有希のことだったのだろうか。

「なんていうか、ストーカーなんて言うなよ」

絞り出たのがこれだから情けない。告白に対してフォローを入れようとするのだ。そもそも……期待をもたせてしまうことを言うのは……

「俺、そんなに俺のこと見てくれてる人がいるなんて思ってた。だから、なんつーか、その、ちょっと嬉しいんだけど」

これに続く甲斐性のないせりふは、運がいいのか悪いのか、結局は言わずにすんでいる。

異変はこの瞬間に起きた。

涼一の知らないところで、時計の針が正午を指した、この瞬間。

腹が鳴った。そういえば昼飯を食べていない。

ガサガサと森を歩きながら、己の運命を呪う。なにが起きたにしろ口なことではない。

体の痛みは、歩いているうちに薄れてきていた。強烈なショックを受けた場合、脳が痛みを勘違いすることがあるとき。ケガの少なさからも、おそらくほとんど無傷に近かったのだ。もう少し早く行動開始してもよかった。

森はまだ続いているようだった。

できるかぎり周囲への警戒は怠らないよう努めた。山で迷った経験などないから、どこまで通じるかは博打の領域だ。獣が襲ってきたような場合は、どの程度の早さで気づけるのだろうか。

そのせいで時間がかかっているのか、もしくはあまりに広大なせいか、いつまで歩いても森を抜けることは叶わなかった。もしや同

じところをぐるぐる回っているのではないかと思ひ始める。

せめて誰かに会いたい。先ほどのような蛮族ではなく文明の通った、とにかくまともな人間と出会いたい。一人で危険におびえながら見知らぬ土地を歩くことの辛さといったら、これ以上のものはない。明るいのはいいが、時折木の間から見える太陽はやはり、間違はなく二つだった。意味がわからない。

暑いし寂しいし、しかもものが渴いている。思ったより気絶していた時間は長かったのではないか。もし水分が足りなかった場合、どれほど歩き続けられるだろうか。

恐怖。

そんな予想はすべきではない。が、いやでも頭をもたげてくる。

このまま森をさまよっていたら？

のたれ死んで、誰にも見つからなかったら？

そんな予想はすべきではない。

しかし。

涼一はいつしか震えていた。もちろん寒いからではない。

気がつけば、もはや蛮族でも構わなくなっていた。日本語だった気がするのだ。日本であれば当たり前だろうが、ここが日本かどうかも疑わしい今の状況では、たとえ自分を殺そうとしている連中も出てきて欲しかった。もしかしたら話せばわかるかもしれないのだ。

そもそも、先ほど追われた時点で、白旗をあげておくべきではなかったのか。混乱していたから仕方なかったとは言え……いや、やはりそれはあり得ない。あのときは太陽が二つあるなどとは思ってもしなかったのだから。

このとき、涼一はこのように、思考の循環に陥っていた。

その結果、怠らないよう努めていたはずの周囲の警戒が疎かになっていたのは間違いない事実である。幸福なことに彼を襲おうとするものはいなかったが、代わりに響いた悲鳴に、彼は哀れなほどビビった。

悲鳴。

思わず木にすがりついて硬直した涼一の耳に飛び込んだ悲鳴。

女性の悲鳴だ。

直下型大地震である。

一瞬前に涼一は気づいた。なんの前触れもなかったにも関わらず、本能とも言つべき警戒機構が彼を焚きつけた。

「秋月さん！」

不思議なことに、この未曾有の大地震を気象庁は記録していない。いや、ほとんどの人間は、地面が揺れたなどとは露とも思っていない。

しかしこのとき、涼一は確かに感じたのだった。

体が浮いてしまうほどの強烈な縦揺れが校舎を襲った。

叫んでいた涼一は危うく舌を噛むところだったが……そして秋月有希は体勢を崩し、倒れ込むのは避けられないところだと思われたが……とにかく、涼一は半分跳ね跳びながら、有希の元へ駆け寄った。

有希が悲鳴を上げた。

「ま、松風君！」

華奢な体を抱き留めようと涼一が手を伸ばし、万が一にも外側に倒れまいと有希は賢明にうつ伏せになろうと努力し、

その二人を、闇が覆った。

涼一の目に信じられないものがうつった。澄み渡っていた青い空が、急速に赤く染まっていった。

太陽があまりにも速くビルの向こうに沈み、あっという間に夜が訪れた。いや、前述の通り、それは闇だった。月も出ない、星も瞬かない、まるで墨汁でもぶちまけたかのように、視界が奪われてゆく。

なにが起こっているかなど考えている暇はなかった。手を取らなければ、目の前の有希すらも見えなくなりつつあった。

なにかを叫んだ気がする。

思い出せない。

しかし、彼の記憶ではおそらくこのときに何かが起こったのだっ
た。

なにかが起きて、そして彼は森に立っていた。

覚えているすべてだ。

その悲鳴には聞き覚えがあった。なんだったかを思い出すのに時間がかかったが、確か去年、聞いたはずだった。

どうやら学園祭の劇で、と思い至った時点で、彼は悲鳴の持ち主が前の席の小橋絵里だと気づく。己の記憶力にはあまり自信がなかったが、小橋の少し年のいったような独特なハスキー声は聞き分けやすかった。確か、劇で悪漢に襲われる町娘だかの役だったはずだ。

となれば、行動すべきは一つだ。

記憶が間違っているかなど疑いもしなかった。蛮族でなく、赤の他人でもなく、クラスメイトが近くにいるという奇跡のような出来事に感謝することで頭がいっぱいだった。

それゆえ、なぜ悲鳴が上がったのかに思いついたまで致命的ともいえる時間がかかった。

おそらく、運が悪ければ死んでいただろう。

ほとんど全力で森を走っていた涼一は、だしぬけに藪から飛び出してきた影となす術なく正面衝突した。

同時にうめき声をあげた涼一と何者かは、見ているものがいいたら笑い転げるかドン引きしてもおかしくないほどに転がった。涼一の方が突進の威力があったようで、つまり影を押し倒す形になる。

影の金切り声が耳元で爆裂し、鼓膜の痛みに顔をしかめる。あまりに距離が近いため逆に誰だかわからない。が、しかし、なんとなく先ほどの悲鳴の主ではないかと思う。

それと同時に殴られた。

いや、殴られたというより張り飛ばされたのだ。もつれ合って転がった二人は、偶然にも涼一が下、相手が上という風な位置関係にあり、また偶然にもほとんど馬乗りのような体勢になっている。俗にマウントポジションという。

そこから繰り出されるビンタが、涼一の顔面を幾度となく襲ったのだった。涼一にはほとんど答えが出ていたが、この調子では相手は全く気づいていない。涼一では思いつきもしないほどの罵詈雑言とともに掌の嵐。

「ちよ、ちよ、こ、こばし、おれ、おれおれ」

この間に一回口内を噛んでいる。計二十発近い攻撃をくらいながら必死でアピールした涼一の声が届いたのか、はたと相手の手が止まった。言うまでもなく小橋絵里である。転がったときだろうか、メガネが半分ずり落ちている。

かなりの近視ときいていた。必死で目を細めてくるが、それでも見分けがつかない様子だ。数秒頑張つて、ずれたメガネを左手で直して、

「ま、松風サン？」

「オス」

誤解が解けたのもつかの間。

「こつちだ！ 近いぞ」

と、彼らのほど近くから、聞き覚えのある叫びが聞こえた。
ビクリと体を震わせた小橋は、倒れている涼一にすがりついて…
見ようによつてはかなり危険な体位であるが、そんなことに気を
回す余裕は無い……曰く、

「助けてください！」

涼一はここにきてようやく、聞こえた声が「悲鳴」だった理由に
思い至り、戦慄した。

涼一たちが立ち上がると同時に、絵里が現れたのと同じ茂みから、
薄汚れた男が現れた。

目が合う。

男が訝しげに首を捻り……そして一つの可能性に至ったと思われ
ると同じくして、涼一も相手の招待を知る。

少し前に涼一を追いかけていた三人のうちの一人だった。

「兄ィ、こつちだ！ 二人いやがる！」

図太い、獣の雄叫びのような声であった。体格は優に涼一の倍ほ
どもあり、ボロの上着から生えた腕は丸太にも見える。あちらこち
らに得体の知れない傷跡があり、その一つは左の頬を、首から額ま
で縦断していた。膨れ上がった筋肉がシャツの下からでもわかる。
熊との違いは体毛くらいだ。

彫りが深く、日本人には見えなかった。服装もやけに前時代的
である。合成繊維には見えない。映画から抜け出したかのような、そ
れはまさに山賊であった。手にもつのはおぞましき刀剣。

すさまじき大声に気圧された涼一が無意識に下がろうとすると、なにかにぶつかった。絵里だ。

涼一の詰め襟を引きちぎらんばかりに握りしめ、大男から身を隠そうとへばりついていて。服を通して、震えているのがわかった。理由は考えるまでもない。

草木が擦れる音がして、新たに二人の山賊が姿を見せる。やはり涼一を襲った二人だ。彼を囲んだ顔に相違ない。

あときは反射的に逃げ出したため、相手のことなど観察する暇は無かった。だが今となつては、絵里を残して逃げるわけにも行かず（逃げたいのはやまやまだったが）彼女の盾として相対するほかない。

「なんだ、生きてやがったのか」

頭にバンダナを巻いた、吊目の男が言った。大男ほどのサイズではないが、こちらも全身に筋肉がついている。同じ用なボロの服で、腰にはナイフ。兄い、と呼ばれていた。

いったんナイフに手をかけ、しかし吊目はそのまま顎へと移動させた。遠慮なく近寄ってきて、涼一をねめつけるように観察している。

「得物はねえ。かといって貴族にしちゃ貧相だ。魔族なら逃げ出すまい……その服も見たことねえな。てめえら、ナニモンだ」

吊目の男の声は、思ったよりも優しく響く。しかし、それが涼一

たちの命の担保にならないことは明白だった。戦力の差は天地ほどにあり、そこから生まれた余裕によるものだ。

だが言葉が通じる。

「……た、助けて。迷ってるんだ。に、日本人だろ？」

「質問してんのはこつちだよタコ。ただの旅人ならムクだけで勘弁してやる。てめえらはどうみてもただの旅人じゃねえ。だから場合によっちゃ殺す。答える、ナニモンだ。どっからきて、どこに行く。目的はなんだ」

やっとのことで言葉を絞り出した涼一への答えはにべもない。

「ロツツ、まだだ」

男の言葉で、後ろのゴリラが動きを止めた。気がつかなかったが、近寄ってきていたのだ。

「おい、こつちも暇じゃねえんだ」

「……神奈川の明勝高校の、せ、生徒。気がついたらここにいた」

とにかく、自分たちがただの迷い人であることを、どうにか伝えなければいけない、と涼一は考えた。相手がなににしる、このままでは殺されてしまう。

涼一を落ち着かせたのは、あまりにも異常な状況に白旗を揚げたしまったのと、彼の背中小さくなっていてる絵里の存在が大きい。相手を見る限りどんぐりの背比べだが、彼女よりも涼一の方が強いのは明らかだ。守らねばならぬ。

「帰りたいただけなんだ。道に迷って、ここがどこかもわからない」
「迷って、気がついたらここにいた？」

吊目の男は拍子抜けたような顔になって、

「迷っただけだってよ！？　ここで！　貴族院のボンクラでももつとマシな言い訳するぜ」

笑い飛ばした。

「う、嘘なんかつかないっ」

「そうかい」

嘘だと思われた理由が全くわからない。涼一がさらに言葉が続けようとしたとき、吊目の男が動いた。

あっという間だ。

男はベルトから引き抜いたナイフを、躊躇なく涼一の肩に突き立てた。

動きがあまりにも速く……対話でなんとかなるかもしれないと根拠なく考え始めていた矢先のことである。

全くの不意打ちに、涼一の頭は追いつかなかった。左肩から感じるはずの鋭い痛みは、やたらにゆっくりと時間をかけ、脳に届く。実際は一秒もかかっていない間のことである。

「いつ……がつ！」

悲鳴を堪えられたのは、やはり背後の絵里のおかげだった。ある

種の使命感が、喉を突き破って飛び出しそうになる叫び声を留めている。無様に泣き叫べば、その時点で彼の心は折れてしまう。代わりとってはなんだが、悲鳴は絵里があげた。

尋常ではない。ほとんど根本まで埋まったナイフと肉の隙間から、じわりと血が流れ出し、シャツを赤く染め始めている。

「おめーバカだろ？ このあたりに迷い込むなんてできねーんだよ」
男はなぜ断言できるのか。

「ほ、ほんとですっ。う、う、嘘なんか……」

背後の絵里が、ほとんど泣きながら言った。

「ま、松風君！ かた……肩が」

「大丈夫、小橋、俺は……」

大丈夫なわけがない。痛みはすでに痺れと化し、左半身がだんだんと動かなくなりつつあった。そのことが何よりも恐ろしかった。こんな異物が体を貫いているのに、痛くないのだ！

「本当に、本当にただ迷っただけなんだ……助けてくれ。なんでも持ってっつていい。俺と小橋の命だけは助けて、くれ」

男がナイフを引き抜いて、涼一はうめいた。異物感がなくなった代わりに、穴のあいた肩から怒濤の勢いで血が流れ出した。

「あのな、はいそーですかじゃすまねえんだよ……しかたねえ、口ツツ、こいつぶんじばれ」

ゴリラ、いや、ロッツが動いた。のそりと近寄ってきた大男は、どうにか抵抗しようとした涼一をあっさりと組み伏せてしまう。つまり、盾をなくした絵里が一人きりになる。

「お、おいつ！ やめろ、なにを……！」

「てめえが喋る気になるか死ぬまで暇つぶしだよ、オラ」

動くことすら叶わぬ絵里の髪の毛を乱暴に掴む。また悲鳴を上げた絵里の頬を、殴りつけた。

「うるせえのは嫌いだ。黙っとけ」

「な、なにしやがんだ！」

もがいても、ロッツの下からは抜けられない。ぴくりとも動かない。

「おまえ、女捕まえたらなににするかなんてわかるだろ？」

「やめろって言ってたんだ！」

「ロッツ」

後頭部を殴られ、顔を地面に打ち付ける。小石が額を裂き、鼻がちぎられたように痛んだ。

「バルポ、おめーやね。確かこのくらいのがいいんだよな」

今までずっと黙っていた三人目が、指をくわえたまま頷いた。無言で吊目に近寄り、気絶している絵里を受け取る。

「なんだこいつ、結構いいもの着てやがるな。バルポ、破るな。上

等モンだ。高く売れるぞ」

頭がグラグラと揺れる。気絶しかけている中で、バルポと呼ばれた小男が、力なく両腕を垂らした絵里からセーラー服を脱がせようとしているのが見えた。

なにがおこるかなど考えるまでもなかった。

そして涼一はまだ、自身に起こっている変化に気づいていなかった。

上にのしかかっている大男、ロツツが、声をあげた。

「あ、兄い、こいつ」

「ああ？」

戸惑っているようだった。このとき涼一の精神は、自己嫌悪と混乱、痛みを怒り、その他様々な感情が入り乱れ暴走状態にあったため、会話を聞いてはいない。キレていた。なにをいっても聞く耳持たず、人を刺し、組み倒し、あまつさえクラスメートを強姦しようとした連中をどうにかしたかった。それが可能であれば。

「な、なんか、抑えきれねえ」

可能であれば。

うつ伏せから両手をついて立ち上がろうとした。巨漢にのしかか

られていたが、わずかずつ体を持ち上げることができた。いつの間にか左半身の痺れは消えていて、まったく自由に動かせる。

「あ、ありえねえ。こんなチビが」

「ロオツツ！ うるせえ、マジメにやれっ！」

両腕の筋肉がちぎれそうだった。無理もない、彼の上には大男である。だが、動く。油断しているのかわからないが、とにかく動く。

「兄い」

「うるせえのは嫌いだったってんだろっが！ ぶっ殺す……ぞ……ぞ」

膝について立ち上がろうとする。重い。バーベルでも担いでいるかのように重い。気を抜くとつぶれてしまうだろう。ゆっくりと、倒れないように、体を持ち上げていく。

完全に立ち上がって、荒く息を吐きながら、涼一は吊目を見据えた。

「な……なんだ、ロツツ、なんだそりゃ」

あまりにも重い。大男が押さえ込もうとしているのだろうが、それを振り払うために、涼一は上半身を振る。思ったよりあっさり体重さは消えてしまう。ガサリと、背後でなにかが草むらにつっこんだ。

「ロツツ！」

吊目の後ろに、セーラー服を持った小男と、脱がされた絵里が、

「うわあああつー！」

考えることすらもどかしい。涼一は雄叫びをあげながら吊目へと飛び込むと、なにはともあれ右腕を振りかぶった。

「え、はや……」

男がナイフを動かす前に、涼一の拳が顔面を捉える。感触などわからぬ。妙な軌道を描いてふつとぶ男を見もせず、彼は小男へと走り出す。

「ぎえっ」

とセミのような叫び声をあげ、小男はセーラー服を放り出した。そのときにはすでに、涼一は懐に飛び込んでいた。先ほどと同じ、右拳で顔を殴る。ふつとぶ小男。

ほとんど無意識だった。その後の行動も同様で、だから涼一にはこの記憶がほとんどない。

彼は絵里との衝突の際に放り出された詰め襟と、脱がされたセーラー服をひつつかむと、絵里の華奢な体を背負い、ともかくここから離れるためによるよると走り出した。

己がどれほどのことをしたかなど、気づきもしなかった。

小橋絵里とは、三年になって初めて同じクラスになった。といってもよく話すようになったのは、五月過ぎの席替えの後からだ。

窓側、涼一の前の小橋が、

「松風サン、彼女いるんですか？」

と尋ねてきたのが最初だった。メガネをくいと上げながら乗り出してくる小橋絵里に、最初は驚いたものだった。

「いや、べ別に、いないけど」

「ふうん」

つまらなそうに絵里は前を向いて、会話は終わった。意味が分からなかったが、次の休み時間、

「松風サン、このクラスだと誰がいいですか？」

今度はメモ帳片手だった。メガネをくいと上げながら。

「え、いや」

涼一は慌てる。ほとんど話したことのない相手に、いきなり告白まがいの挨拶である。

「たとえば、風間サンとか」

「はあ？」

男の名前が出た。

「あ、やっぱり女子がいいんですか？　じゃあ秋月サンとかどうでしょう」

「あ、秋月さん？　いや、話したことねーし」

「ほうほう、顔で判断しない、と。まあ秋月サン、かわいいですけどね」

「なんだよ、急に」

思い返せば、ここで秋月有希の名前がすでに出ていた。

「彼女に求めるコトとがあります？　いやプレイとかではなくて、要素みたいなことで」

それからしばらく、小橋絵里は自分に気があるのではないかと勘違いしていた。

目に入ったのは、クリーム色の布一面。

悲鳴をあげつつ飛び起きた涼一から、薄布が舞い落ちる。

背中がぎしりと痛んだ。かたい床で寝ていたせいだ。

「こ、小橋っ！」

見回しても小橋絵里の姿はない。それどころか……森ですらなかった。

あちこちにおかれた木箱、鎮座する机に椅子。そして視界を埋め

尽くす布は……つまり、テントのようだ。

「小橋、どこだ！」

「落ち着け」

鋭い声が響く。警戒に思わず体を固めると、三段に重なった木箱の裏から誰かが出てきた。

「彼女は安全だ。一足先に目を覚ました。今は外で食事している」

声は女だ。いや、当たり前だった。彼の前に立っている、甲冑に包まれた人間は、紛れもない女である。

ウエーブのかかったブロンドが映える。銀色の甲冑には複雑な衣装が施されていて、すなわち意味が全くわからない。記憶にある山賊たちといい、本当に映画の撮影ではないのか。

「お前たちの事情はわかっている。私たちはコクゲンだ。安全は保障する」

「……コ、コクゲン？」

「シユミット王国正規軍3番隊。私はフラウス・ホワイト。お前もここがどこかはわからないのだな」

なにを尋ねてよいのかもわからず、彼はあっけにとられたまま頷く。

フラウスと名乗った女は、手近な椅子に涼一を座らせ、テントの入り口に歩き、

「コバシ、起きたぞ」

惚けたままそれを見てみると、しばらくして絵里が飛び込んできた。

「松風サン！」

「こ、小橋。なにもされてないか」

「大丈夫ツス。ありがとうございます。で、でも、その、肩は」

絵里が手を伸ばしてきて、涼一は自分が上半身裸なことにやっと気づいた。

「さつきも言ったが、彼の肩に傷などない。安心しろ」

「でもでも、あんなに深く。血だって……」

「確かに上着に血はついていたが、実際に傷がないのだ。疑うならよく見るといい」

絵里の手が、恐る恐る肩口に触れる。痛みを覚悟していた涼一は、なんともないことに気づいて、自らの右腕で掴む。なにも異常はない。

「う、嘘だろ」

刃は完全に埋もれていたはずだ。血も驚くほど流れた。それが、まったく消え失せている。

「疲弊していることにはかわりない。ゆっくり休め、と言いたいたいところだが……まあ、まず食べるがいい。外に用意させてある」

言われて、腹がなる。どれほど寝ていたか知らないが、どちらにせよものを口にする機会などなかった。

立ち上がると、頭がグラリと揺れた。先ほどはなにも感じなかつ

だが、ふわふわと漂っている気分だ。

「や、やっぱり寝てたほうが」

「いや、腹、減ってるんだ」

それにここは蒸し暑い。外に出れば幾分快適だろう。

「来い」

フラウスに連れられて、テントの入り口へ進む。

「あ、あの、松風サン」

おずおずと小橋。

「びっくりするかもしれないけど、その、気を確かに」

ある程度予想はつく。

入り口から外に出る。

予想はつくが……

「……ぐ」

声を漏らさずにはいらなかった。

テントは一つではなかった。見渡す限りのあちらこちらに大きな

テントが張られ、辺り一面を帯剣した戦士たちが闊歩していた。

馬のような生き物には角が生えており、中には翼を持ったものまでいる。誰も彼もが蛮族に負けぬ体躯の持ち主で、笑い声、怒声、様々な声や鎧の音などが響き、なぜ今まで聞こえていなかったのかと耳を疑いたくなった。

ここにきて、涼一は今度こそ思い知ったのである。

ここが、自分の生きていた世界と全く異なる、未知のものであることを。

「バウイエ、旅人が目覚めた。食事の用意を」

先頭を歩くフラウスが、焚き火の燃えカスの前であぐらを組んでいる兵士に声をかけた。

「ウス、お嬢さんはもう一杯いりますか」

「望むだけ出してやれ」

呆気にとられたまま、フラフラと歩く涼一。絵里が手をかさねばすぐにでも倒れてしまうだろう。

バウイエは涼一の腕をとると、用意された簡易食台に座らせる。絵里は隣に、そしてフラウスは対面に座った。食台はこの一つきりしか見あたらず、他の兵士たちは地べたにあぐらをかいている。

涼一の目の前に椀がおかれた。よくわからない、白乳色の粥のよ
うなものだった。隣の絵里は困ったような笑顔で断っている。

「上等なものではないが腹にたまる。食べる」

差し出されたスプーンを手に取り、しばし湯気のとつ粥を眺める。
その様子を眺めていたフラウスは、特に感慨もなく、絵里の方を
向く。

「名前はなんだったか」

「え、ええと。松風サンツス。松風涼一サン」

「マツ……ナギ……マtsナギ……お前たちの名前は発音しにくい
な。まあ、いい。せつかくだから最初から話そう」

スプーンが粥の中を潜る。米には見えないが、何かの穀物が盛り
上がって、甘い匂いを放った。

「お前たちは気がついたらあそこの、森の中にいて、さまよってい
たところを山賊に襲われた。しかしどういうわけか逃れ、ここまで
たどり着いた。二人とも知り合いで、学生。カナガワと言うところ
に帰りたい。確認するぞ、間違いないな」

すくい上げると、湯気が顔にかかった。

迷うわけもなかった。一口で、決壊。多少堅いが噛めぬほどでは
ない。それにつぶれた中から甘い汁のようなものが出てきて、空き
っ腹に流れ込んでいく。白乳色の液体はその汁が湯で薄められてい
るもののように、喉に引っかからない。

「信じがたい話だ」

「でまかせでさ」

瞬く間に空になった椀に二杯目を盛りながら、バウイエという男が言う。短い草色の髪の毛が陽光に映えている。

「こんなご時世だ。住処を追われたガキが紛れ込んでもおかしかねえ。こつやつてメシにありつこつと、どうにか頭を絞ってやがんです」

「口を慎め。このあたりは封鎖されている」

「魔法で張った結界なんて信じられませんか。どつかに穴があったに違いねえ」

「バウイエ」

魔法、と聞いて、涼一はいよいよ混乱する。魔法、魔法だと？

「さて。信じがたいのは確かだが、お前たちがただの旅人かと言われれば、それもまた納得しがたい。この地域は、我がシュミット王国の魔法士によって全域が封鎖されていて、入り込むことも出ることもできない」

粥をかきこみながら、涼一はどうにかあたりを確認する正気を取り戻した。目に入れたくないファンタジックな連中の向こうに、岩肌が広がっている。

右を向けば、大きな湖のそばだった。その向こうに木立が広がっていて、先ほどのフラウスの言葉から、おそらく襲われた森と平地の境界だった。彼方に屹立した崖が見える。

「だから……お前たちは結界発動時にこの中にいたか、そうでなければ無から現れたことになる。ここでそれを追求はすまい。実際にいるのだから」

このうら若き女騎士は、今まであったロクでもない連中に比べれば物わりのよい方のようだった。これがどんなに幸運か、そこまで考える余裕はまだない。

「先ほどコバシにも説明したが、賊どもや私がお前たちをただの旅人だと思えないわけは、おおむね服にある」

確かに、涼一たちの学生服はこの風景にはそぐわない気がする。だが、元は軍服だ。似たようなユニフォームくらいあってもよさそうだ。

「材質と縫製にまったく見当がつかないのだ。これほどきめ細やかな作りの服は、少なくとも私たちの国にはない」

「材質……縫製」

つぶやいてみる。変哲もない量産品のはずだった。

「お前たちの体つきもそうだ。まったく旅に耐えうるものではない。コバシはともかく、Matsナギ、お前は飢えているようにも見える」

一応陸上部で、それなりに鍛えてるつもりだ。まあ、相撲部などの重量連中に比べたら細かい方である。

ましてやこの男たちと比べるのは酷だ。

「だがコバシの言うところ、お前くらいは普通なのだそうだ。その年まで生きていられたのだから、まあ信じてもいい」

信じてもいいとはまた、ずいぶん言いぐさであった。

「だから私は、お前たちにここがどこなのか教える。まずは、真偽

を確認してからな」

イヤな予感がした。

「今森を探させている。いいか、お前たちの話でもっとも腑に落ちないのは、砂烈団から逃げ出し、無事にここまでたどり着いたことだ」

「砂烈団？」

遠く、木立から兵士が数人出てくる。手に何かを引きずっている。

「しばし待て」

立ち上がったフラウスは、バウイエを連れて兵士たちの元へと歩いていく。

「砂烈団ってなんだ？」

「私たちが襲われたヤツらッス」

見れば、隣で絵里が小さく震えていた。

「お、おい、思い出すな。忘れる」

「わ、私、殴られ……」

「おい」

肩に手を置くと、びっくりと体を硬直させて、

「……スイマセン、三日たってもこれです」

「三日……三日も寝てたのか、俺？」

「はい。私を担いで、森の入り口に倒れてたらしいです。私も目が

覚めたのは昨日で「

三日という数字は、少なからず涼一にショックを与えた。無防備なまま、寝ていた期間が三日。

「ナギ」

こちらに歩きながら、フラウスが言った。

「お前が殺したとしか思えない」

言いくかっただので呼び方を変えたのだろう。

それをぼんやりと考えながら、涼一は次に彼を襲うさらなる衝撃を待たねばならなかった。

お前が殺した。

「あの男は砂烈団の副長だ。顔がよくわからないが、間違いない」

フラウスの冷静な声が、涼一の胸に刃物を突き立てた。

「コバシの話ではお前たちを襲ったのは三人。一人はロッツ、もう一人の名前はコバシは知らなかった。奴の名はドレマン。ロッツという男の死体はなかった」

顔がよくわからなかった。

涼一の右手に、鈍い感触が戻ってきた。手が震え、スプーンを取り落とす。

記憶の底に眠っていた光景がフラッシュバックする。

「一撃で顔面を粉碎されている」

「やめろ」

「なにをした？」

「やめろっ!」

うつむいたまま叫んだ。

フラウスの顔を見るのが怖かった。絵里の顔を見るのも怖かった。永遠とも思える時間が流れた。

「……夢中だったんだ。わからない。なにもわからない」

「しかし、お前たちが砂烈団から逃れる方法はない」

「知らない」

「単純に逃げるなど不可能だ。実際に出会ったお前たちが一番わか

っているはずだ」

「俺じゃない！ 人殺しなんか……ただ殴っただけだ！ バットなんか使っちゃいけないのに、死ぬわけがあるかつ！」

いつの間にか、喧噪が止んでいた。自分の腹と粥しか見えないが、誰もが聞き逃すまいと耳をそばだてているように思えた。

絵里になにか言っただけだった。

「……わかった、いい。わかった。忘れる。お前たちがいたところがここほどに物騒ではないことはコバシから聞いている。この大陸にそんな場所はないが」

しばらく沈黙が流れた。

「話の続きだ。ここはウラナス大陸のやや北、中央に位置する。シユミット王国とシバ領の境だ。魔導後記168年。現在この大陸は、大規模ないくさが始まる直前で、私たちは隣国との戦いに先駆け、内憂である砂烈団の討伐にあたっている」

耳慣れない単語ばかりだ。

「お前たちが帰りたいというカナガワは、少なくともシユミットにはない」

あつてたまるか。こんなトチ狂った世界と同じ場所に、故郷があるはずがない。

それがどのような答えになるか、涼一は考えないようにしている。

「似たような地名は、西の島国、堯菱にありそうだが、コバシの話

ではお前たちの国は二ホンだという。残念だが知るものはいなかった」

人を、殺した？

「だから現状、お前たちがもとのところに帰るのは難しい。そもそも今は結界が張られていて、このあたりからは出られない」

その結界の原理とはなんだ。

「だから、しばらくお前たちの身はシュミット王国が保護する」

涼一が食台を殴りつけた。

その衝撃で、あまりにもあっさりと、木製の簡易食台は折れて崩れる。残っていた粥が地面にぶちまけられた。

「さつきから黙って聞いてれば好き放題、い、言いやがって」

「……その膂力か」

「うるせえ！ なにが砂烈団だ！ なにが保護だ！」

「ま、松風サン、乱暴は」

「死ぬところだったんだぞ！ なんだよこれ！ 言ってるじゃねえか、帰りたいだけだつて！ 人殺しだつて、ちくしょう、ちくしょう……何で壊れてんだよ。なんだよ、こんな力、俺にはねえよ」

「腐ってただけツス！ だから松風サン、お、落ち着いて！」

涼一と壊れた食台を見比べながら、フラウスは何事か考えている。

「お、おいつ！ なにやってんだ！ ホワイト將軍、お怪我は！？」
バウイエが飛んできた。フラウスは手で彼を制し、

「その様子だと、なにがあったか思い出したようだな。コバシは気絶していた。お前たちを見つけたときの状況からそれは間違いないであれば、だ。お前が倒したとしか考えられないのだ。少なくとも二人を」

「た、確かに、殴ったよ……でもそれで、死ぬなんて。う、嘘ついでんだろ？」

「見るか？」

フラウスは平静で、それが涼一にはたまらなく恐ろしかった。冗談でもなんでもなく、この女戦士は、事実だけを述べているのだ。

「嘘だつて言ってくれよっ」

「そ、そうツス！ 松風サンが人殺しなんてするわけが」

「お前たちの倫理観はよくわからないが、ナギが殺さなければお前たちは死んでいただろう。コバシ、ナギに感謝した方がいい。お前は死ぬだけではすまなかった。そしてナギ、誇れ。お前は仲間を守ったのだ」

そう考えて納得できるのなら、言われるまでもなく折り合いはついていた。

相手が悪党であろうと、自分の命を狙っていたのだとしても、殺したことに変わりはない。

「コバシにも話していないことがある。お前たちが見つかった、三日前だ。おそらく関係のあることだからよく聞け」

この世界の、どこに関係があるというのだ。起きているすべてのことが、涼一たちの常識とは乖離しているではないか。

「ナギ、お前と同じ服装の少年が、砂烈団の連中に連れ去られているのを斥候が見ている」

「……え？」

涼一と絵里が、フラウスの顔を見た。

「直後にお前たちが見つかったので、理由はどうあれ、斥候がみたのはお前だと考えた。だがコバシの話を聞くに、違う人間のようなお前たち、まだ連れがいるのか？」

「……い、いるのか？ ほかにも」

「だ、だって松風サン。私と松風サンがここにいるんすから、ほかの人だって」

「ど、どんな奴だった！？ 髪は、顔は！」

「髪が黒だということ、お前と同じ服ということ以外わからん。遠目からしか見ていないが、気絶していたようだ」

「なんでもっと早く……」

「お前たちを信頼できなかった。だからコバシから話を聞いた後、裏をとった。それが今、見つかった。だから話したのだ」

回りが騒がしくなった。こちらを注視していた兵士たちが、今度はおわただしく動き回っている。

「さつきもいつたが三日前のことだ。私たちはその人間は死んだものと判断している」

なにが言いたいのだ。

「た、助けてやってくれよ！ 頼むから」

「無理だ。砂烈団は手強い。救出に手を回す余裕はない」

こんな話をしておいて、なにを言うつもりか。すでに死んでいると判断するなら、なぜ思わせぶりな伝えかたをする。

「だから、お前がやれ」

余市隆弥は、放り出されて目を覚ました。屈強な大男たちに囲まれていて、捕まったときの恐怖がよみがえる。

昨日の夜は物置のような臭い小部屋に押し込められ、怖がっているうちに深い眠りについてしまったようだった。

TRPGをしていたはずだった。同じクラスの仲間、乱堂忍と成島鳥夫と、新学期初めの記念キャンペーンをやっていた。

「センター試験のことは考えない」が三人の合い言葉で、ガリベンコンビの嫌悪のオーラを身に受けながら、3・3の教室で。

「えー、じゃあジエイド君の敏捷で十面二個判定ドゾ」

隆弥はダイスを手に取り、これから起こるランダムイベントを決定するために、放り投げた。

ころころ。

「ん、ん？ あちゃー、ファンブったかあ」

鳥夫が嬉しそうに言った。

「いやはや、こういったランダムイベントで端の数は危険でござるよ、ジエイド殿。で、なにがおこるでござるか」

乱堂忍はさつきからこの調子だ。この中ではもっともディーブだと思われる。

「ええと、ファンブルは……ちょ、これマジ勘弁してへへへ」

「はーやーくー、まだー？」

「異世界に召喚される」

「うは、シナリオ崩壊！ きたこれ、きたこれ！」

「さらに六面二個で召喚されるゲームを決める。え、これ違うゲームに行くの？ あるあ、ねーよワロチ」

その時だった。

地震、悲鳴、闇、そして森。

涼一に比べて隆弥はより不幸だった。

ちょうど砂烈団の潜んでいた場所、そのど真ん中に立っているのだ。

「ロツツ、ロオツツ！」

一人が叫ぶ。しばらくして、入り口からのそのそと、ゴリラのよ
うな男が入ってきた。

今からなにが起こるのかさっぱりわからず、しかし悲鳴を上げる
度胸もなく、隆弥は簀巻きのままがたと震えていた。夢、夢と
繰り返し言い聞かせるのが精一杯だった。

「お前がやられたのはこいつか」

「へ、こいつは……違います。あのヤロウよりもチビだ。だけど服
は同じでさ」

「同じ服だと。ロッツ、間違いねえな。次しくじったらどうなるか
わかってるよな」

高圧的に大男とはなしているのは、ライオンのたてがみのような
髪の毛の中年だった。隆弥が正気であれば、若い頃のシュワルツエ
ネッガーがライオンのコスプレをしたのに似ている、と考えたこと
だろう。

「そいじゃあこいつも、そのなんか変なガキと同じ用な力を持つて
るかもしれんってか」

「しかしボス、ロッツを持ち上げて放り投げるなんて、しかも副長
をやっちまうなんて、そんなことができる奴なんて……」

「ドレマンのヤロウが帰ってこねえのが証拠だ」

「だが、ロッツのヤロウが正規軍に売ったのかもしれない」

「んなことしてなんになる。正規軍が、仲間を売ったからって温情
をかけるような甘ちゃんかと思うか。減刑なぞされないのはよくわ
かってんだ。するはずがねえ。いいか、よくはわからないが、このガ
キが恐ろしく強え可能性がある。だが今はこんなんだ。なにかいい
方法はあるか」

「ボス、そんな奴なら正規軍に特攻させましようや！」

「バカ言つな、ドレマンの兄いをやっちまうんだぞ。敵に回ったらどうすんだ!」

男臭い喧噪の中、隆弥は発狂寸前だった。口々に発せられる己の処遇についての言葉も耳に入っていない。

捕まったときも、その後も、彼に為す術はなかった。内向的で運動の苦手な隆弥は体も小さく、筋肉もついておらず、色白のもやしっこだったから抵抗らしい抵抗もできなかった。何度失禁し、気絶したことが。

もちろん、鏡を見る機会もなかった。

だから、ドレマンらを打ち倒したときの涼一のように、彼もまた、己に起こっている変化に気づいてはいなかったのである。

右目に起きた、劇的な変化に。

「……俺が？」

フラウスは頷く。

「どうやったかはわからないが、武器も持たずに二人を倒したのなら、お前は戦力になる。だからこれは私の打算によるものだ。砂烈団掃討に力をかせとまでは言わないが、仲間を助けるといふなら、道案内くらいはしてやる。道すがら敵を打ち倒してくれればずいぶんありがたい」

相変わらず表情を変えずに続けた。

「一人くらいならかしてやれるぞ」

なにができるというのだ。涼一は迷っていた。あんなもの、ただのまぐれかもしれないではないか。

だが……だが、記憶が確かならば、あの力は……

「待ってください。松風サンは目が覚めたばかりッス。それにそんな危険なこと、させられない」

一撃で相手の命を奪った、あの力はなんだ？

「お前たちを拾ったために二日遅れている。恩をきせるわけではない。これ以上遅れるわけにはいかないから、今から殲滅戦に入るということだ。意味はわかるな」

戦いが始まってしまえば、クラスメートの命の保証はない。いや、確かにフラウスの言ったとおり、もともと生きているかも怪しい状況である。

今を逃せば、その生死を確認することはできないということだ。戦いが終われば、間違いなく死んでいるとフラウスは伝えたいのだ。

もし生きているのなら、助けるためには今、決断するしかない。

「……条件がある」

「できるかぎり叶えてやる」

「戦いが終わったら、俺たちを安全な場所まで、連れていってくれ。命の危険がないところまで」

「もとよりそのつもりだ。約束しよう。なんなら装備も持って行け」

涼一の頭が冴えてくる。明確な目的ができたことで、冷静な判断力が戻ってきている。

鎧は不適切だ。見る限りかなり重い。涼一の力がどれだけ強くなつたかはわからないが、慣れないものを身につけていては思うように動けなくなるかもしれない。

剣は、剣はどうだ？

「ここからは全員いなくなるのか？ 小橋を守ってほしい」

「この情報は相手も知っている。私の側にいるのが一番いい」

「松風サン、なに言ってるかわかってるんですか！？」

「小橋」

突っかかってくる絵里を、涼一は押しとどめた。

「せ、戦争なんですよ！ わざわざいなくなつたって、終わった後に探せばいいじゃないツスカ！」

絵里の言うこともわかる。なにせ、その類の訓練も受けておらず、知識もほとんどないのが彼らだ。だからこそクラスメートは耐えられまい。

戦いの邪魔になるようなら、砂烈団の蛮族に殺される可能性もある。

クラスメートが生きているなら、助けるには本当に今しかないのだ。

そして、涼一はクラスメートが活着ている方に賭けたかった。

「今だけだ。次だけ運が良ければ、俺と小橋、んで誰かわからないが、学校のヤツと三人、とりあえずあてのないままうるつくのだけは避けられる」

「う、運って……」

「突っ込んだりはしない。バカじゃないんだから、わかつてる。小橋もヘタするなよ。この人の側から離れるなよ」

そしてフラウスを振り返り、

「行く。連れていってくれ」

「正規軍だ！　くるぞ！」

ギシ、と目を覚ます。

暗闇の中、縛られたままで全く体の自由が利かない。

三日前からずっとこうだ。

食事も与えられず、たまに見物に来ては貧弱だと笑っていく。学生服はとうにはぎ取られている。

小便もたれ流すほかなく、人生で初めて経験した畜生並の扱いだった。

彼らの目的もわからず、なぜ自分がここにいるかもわからず、おぼつかぬ思考のなか、ただ無為に怯えているだけだ。

だから外が騒がしくなった今も、彼は震えている。

「迎え撃て！　奴らさえやっちまえば、正規軍に余力はねえ！」

助けてほしかった。誰でもいい。ここから逃がしてくれさえすれば、なんだっていい。

余市隆弥は中学生の時に見た深夜アニメにのめり込んだ結果、日陰者の道を歩くことになった。

いや、適切ではない。内気で小心者だったのが、さらに内向的な趣味に目覚めただけのことである。

元々学校のヒエラルキーでは底辺だった彼は、同じく底辺である乱堂忍とつるむようになった。高校に入ってから友達はおたくば

かりで、しかし別段、それに不満を抱いたことはない。

アニメの話題は楽しかったし、どのキャラが好きだのあの展開はいただけないだの、自分でも結構充実したと思っている。

彼女は望むべくもなかったが、18禁のゲームを忍に借りたり、かわいい絵のライトノベルやマンガで用を足していた。

TRPGを始めたのはやはり忍に誘われたからで、高校に入ってから鳴島鳥夫を含めた六人ほどで、ゲームマスターを持ち回りで楽しんでいた。

始業式の後も、短いセッションの後は忍の家で集まるはずだったのだ。

彼はエルフの魔術師で、後衛から仲間たちをサポートするなくてはならないメンバーだった。

それが今だ。

捕まってからどれだけたったかはわからない。

ゲームの世界に迷い込んでしまったのだ、と思ったこともあった。ネット小説でよく読んだ。突然異世界に召喚された主人公は、手に入れた神をも凌駕する力で傍若無人に暴れ回り、美少女等を捕まえては惚れさせている。

だがそれは、その儚い希望は、あつという間に打ち砕かれた。なにしろ捕まっているし、女性など見ていない。周りには、いとも簡単に彼の命を奪うことのできる乱暴者ばかりだ。

なにかの間違いだ。

あつてはならないことなのだ。

涼一は遙か前方にいる。絵里はフラウスのやや後方、百人程度の軍隊の最奥部にいた。兵士たちは皆、鋼鉄製の鎧兜に身を包み、剣を穿いて更新している。

馬に乗っているのは数人。フラウス、バウイエ、後は隊の周りを忙しく走り回っている。時たまフラウスの元へ、何事か伝令に来ていた。

「相手は森だから、矢を高くとばすことはできない。ここまでは届かないから安心しろ」

フラウスは翼と角を持った馬にまたがっていた。豪勢な、羽根飾りのついた兜を被っている。

「……納得いかないことがあります」

「今でなくてはダメか」

「ダメじゃないツス。でも、どうして松風サンを誘ったツスか。怪しくはないんですか」

「砂烈団の構成員、ましてや副長を殺したのなら、お前たちの依るべきは正規軍にしかない。敵の敵は味方だ」

「だからって、あれだけで戦力になるとは考えられないツス。別の原因で死んで、私たちが自分がやったように言ってるだけかもしれないのに」

「そうなのか？」
「じまかさないてください！」

周りの兵士たちが絵里を見た。が、前方注視というフラウスの声で、すぐに元に戻る。

「悪く思うな。だが今の私ではお前を納得させることは難しい。こは素直に、お前たちの仲間を助けるように提案しただけだと考えてくれ」

「敵と通じているかもしれないですよ」

「ならばお前をここに残すまい」

「私にも、松風サンと同じ力があるかもしれない」

「私が死んで正規軍が瓦解すると考えているならよほどありがたい。砂烈団がそこまでバカであれば、この戦いも楽だろう」

ああいえばこう返ってくる。だがフラウスの理論は敵であるという可能性を否定する消去法で、積極的に涼一たち異邦人を認めるものではない。

「コバシ。見も知らぬ私がナギにないを望んでいるかわからないのはわかる。死ぬ可能性もあるだろう、戦場だからな。だが私には、一つあてがあるのだ」

「あて……？」

「ああ、ナギは生き残るぞ」

確信めいた物言いは……その理由は定かではないが……

「ナギといったな」

バウイエが馬の上から言う。

松風、と訂正したところで、大した意味はない。

「戦いが始まればお前を守るものは自分だけだ。今から布陣するが、お前はレンジエとともに別行動しろ」

「別行動？ どうして」

「ホワイト將軍の命だ。お前はできるだけ砂烈団に見つからないようにして、奴らの本拠地の側でしばらく潜んでいる。レンジエ、任せる。奴らが出払ったら潜入だ」

「御意」

レンジエに招かれつつ隊を離れ、南へと下る。

森を横目に見ながら、隠れるところの少ない平原を、草むらの中、どうにか歩いていった。体を屈めているので腰が痛くなる。

「砂烈団の連中は隊の動きを注視していますから、十分離れて森に入ります。なに、ドレマンが欠けたんなら後は筋肉自慢ばっかですわ。こっちには気づきません」

レンジエは、年齢だけで言えば涼一と変わらなそうな青年だった。体つきは小さいが、作りは大違いである。中腰でもまったくぶれずに、素早く進んでいる。

おいて行かれないようにするのが精一杯だ。ほかの兵士とは違い、革でできた身軽そうな鎧に、短刀を挿している。

「剣の扱いには慣れてなさそうなので、無理に使う必要はありません。真正面から二人倒せるのなら、むしろ素手のほうがいいですね。あまり音を立てないように」

借りた剣がガチャガチャと鳴っていることを言われたのだろう。

「俺についてきてよかったのか。あんたも戦力なんだろう」

「あつしは戦闘が始まるまでが仕事ですわ。見ての通り、非力なもんで」

とてもそうは見えない。日本の力自慢に、彼異常の筋肉を持った人間がどれほどいるだろうか。

体格の基準がまるで違うことに、改めて涼一は全く違う世界なのだと思い知らされた。涼一が飢餓だと思われたのも納得がいく。

「いやいや、これは戦士としてですわ。訓練していない男なら、まああんたほどじゃありませんが、ひよろつちいやツもいますわな。むしろその体でどうやって殴り殺せるのか知りたいもんです」

見せてもらう機会があるやもしれませんが、とレンジエは言った。

「さて、しばらくここで待ちます。その間に休憩と、心の準備をしておくんですな。フラウス将軍の話では戦いの経験自体がほとんどないそうですが、いざ始まっちゃったら、相手はそんなことお構いなしですぜ」

「……戦いつていったら、やっぱり殺しあいか」

「そりゃ、そうですね。特に砂烈団は夕チが悪い。今のうちに皆殺ししておかないと、いつ背後を突かれるかわかったもんじゃありませんわ」

「隣国と戦争するって言ってたな」

水筒を差し出ししながら、レンジエは言った。

「あんだ、本当になにも知らないんですな。マルドールだけじゃありませんわ。南のセンとも、もしかするとコトを構えるかもしれない。まさに一触即発です」

「なんでそんなことになっただ？」

「それは言うなと言われている。たぶん、いずれフラウス將軍から話があるでしょうな……早けりゃ、この結界が解かれた後でも」

その言い方になにか含んだところがありそうで、涼一はいぶかしんだ。

「なにか知ってるのか？」

「すぐにわかりますわ。生き残ったら」

それと同時に、鐘が鳴った。

「始まりました」

男たちの雄叫びが、ここまで届いた。

「行きましょう。さ、ここからは常に気を緩めないように。念のためぐるりと回り込んで奴らの根城の裏に回り込みます。おそらく誰にも会わないと思いますが、絶対じゃありませんわ。あっしもあなたの命の保証はできません。会ったら殺す。これを忘れないように」

うなづく。だがレンジエの言った「会ったら殺す」をどれほど理解していることが。いざ戦いになって、涼一は敵に向かっていけるのだろうか。

だが、だがしかし。

クラスメートを助けねばならないのだ。

レンジエの合図で、体を低くしたまま、草むらから飛び出して森の中へと突っ込んだ。すぐさま大樹の陰に寄り、息を潜める。レンジエが耳を澄まして、

「誰もいませんわ。森の戦いは時間がかかる。焦らずにゆっくり行きましょう」

命に関わることだ。慎重になるのはわかる。タイミングは戦局次第だから急ぐ意味がないのもわかる。

だが、クラスメートが捕まっただけで、いつ死んでもおかしくない焦りを抑えるのには苦勞した。

「常に周りに気を配るように。罠がある時は教えますから、ひっかからないように」

罠。

「おそらくあなたの仲間は罠に引っかかったんですわ。奴ら、基本的に追い剥ぎですから、死にはしませんわ。この結界張られてから仕掛け直してなけりゃね」

戦士たちが森に向かって進軍を始めたのと同時に、風切り音がいくつも聞こえた。よく見えないが、何かに当たっている。

「矢だ。森の戦いは中にはいるまでが一つの勝負でな。この森は獣道しかない古い森で、隊列を組んで素早く入る道が無い。だからこのように、中から放たれる矢を盾で防ぎながら前進するのだ」
「盾で……防げるものなんスか」

悲鳴。

「完全に防げるのなら矢はいらん。だがまあ、木でも鋼鉄でもあつたほうがずっといい。それにさつきも言ったとおり、森では矢が打ち上げられん。真つ正面から飛んでくるなら、真つ正面に盾を構えておけばいいのだから楽だな」

楽だというフラウスは、しかし緊張した面もちを崩さない。

「まずは森の入り口を制圧する。その後、相手は散ってゲリラ戦でくる。用意する間を与えずに追撃できるかが二番目の山だ」

怒声が轟いた。

金属音が森のあちこちで響き初める。

命のやりとりが始まったのだと、わかった。

しかし現実味が全くない。今、自分が立っているすぐ近くで、殺し殺されているという、その事実。

まだ絵里は、これがフィクションなのだと期待しているのだ。

部屋の外が喧噪でいっぱいになった。

隆弥の呼吸が、動悸が速くなる。なにが起きているのか知らないが、なにかが起きているのは間違いない。それに先ほどから聞こえる「攻めてきた」という言葉。「迎え撃つ」という言葉。

猿ぐつわが切れそうなほどに、奥歯を噛みしめていた。後ろ手に縛られた上から、さらにギチギチに体全体をロープで拘束されている。あちこちがすり切れすほどもがいても、いっこうに解放されない。

この場から消えてしまいたい。喧嘩などとは全く無縁の、無害な人生を送ってきた。それでなにも問題なかったのだ。今回も自分など無視して、やりたいもの同士でやってくれればいいのだ。

しかし扉の前で、不穏な会話が始まった。

「おい、あの小僧を放っておいていいのか」

「あれだけ縛ってたんだ。なにもできねえし時間もねえ」

「だがよ、ロツツのバカを投げ飛ばしやがったヤツの仲間だって話じゃねえか。体格なんぞあてにならんぞ」

「お前、まさか信じてんのか？ いや、たとえそうだとしても、あのカキ、今までそんなそぶりなんてぜんぜんなかっただろうがよ」

「この攻撃を待ってたのかもしれない」

「考えすぎだ。行くぞ、さすがに正規軍だと無事じゃすまねえんだ」

「いいや、俺は殺しておいた方がいいと思うぜ。動けないならなおさら今のうちだ。殺しておいたら、ふん、それこそ安心だ」

「ボスは殺せと行ってねえぞ」

「戦いが始まって言うのを忘れただけさ……」

「つきあいきれねえ。先に行ってるぞ」

「おうよ。すぐに追いつくぜ」

この会話が、まさか自分を対象にしたものだと、信じられなかった。

殺しておいた方がいい、だと？

背中をわき上がる怖気に、わき上がる涙。

意味がわからない。

なにもしてないではないか。なにをする力もないではないか。なぜ構うのだ。

今までがそうだったように、これからも無害に、地味に生きていたいというだけなのだ。

生きていても邪魔などしないし、しようとも思わない。勝手にしててくれ。こんな騒ぎなどとは全く関係ない人間だ。

だが。

目の前の扉がガタガタと鳴って、

「チツ。鍵はどこだ」

それが逃げようもない運命のだと、目の前に突きつけられた。

「めんどくせえなあ」

少しの間。

ドンッ！

「ウグッ」

我知らず声が。扉が乱暴に蹴られたのだ。何度も何度も。そのたびに外から漏れ入ってくる光が大きくなる。何度も何度も。これでは……開いてしまう！

戦闘が途絶えた。

音の聞こえていた方を見た涼一は、先行するレンジェがそのまま行ってしまうのを見て慌てる。

「お、おい、まさかもう終わったのか」

慌てて進みながら言う。

「んなワケありませんわな。まだ緒戦が終わっただけです。これから進入した隊と散開した砂烈団のゲリラ戦が始まります。遭遇の確率もあがりますんで、これまで以上に注意してください。こんなところまで来んとは思いますがね」

ドレマンがいたならこれほど簡単じゃありませんわ、とレンジェは続けた。

「あんたが殺しておいてくれてよかった」

レンジエに他意はない。この世界ではこれが普通だ。特に軍人なら、勝利までの道が楽になるのは大歓迎のはずだ。

だが、涼一にはその言葉がきつかった。

「ドレ……ドレマンってのは、やっかいなヤツだったのか」

「まあ、参謀役ですわな。ほかよりちいとばかり頭が回るっただけで、脅威ってまではないきませんが。ただいるよりいない方が楽なのは確かですわ」

上り坂になった。

「このまま山を上って、完全に背後に回ります。実のところ、あんたたちが襲われた場所の近くでしてね。お連れさんの話を聞いて、ちよつと探しに来たところで場所がわかったってわけです。奴らに本拠の場所を勘違いさせられていました」

「勘違い？」

「ええ、撤退の仕方がおかしいとは思ってたんですが。ドレマンの死体が放置されてたのも、相手側に頭の回るヤツがいない証拠ですわ。死体さえなければ、あっしらはまだドレマンが生きていると思ってたんだ……おつと、見てください。ここ、草で隠れているが細い紐が張ってある」

「……引つかかったらどうなるんだ？」

「わかりませんわな。かかってみますかい。どうせ鳴り木か落とし穴かですわ。ですから、この紐の先も踏んじやいけねえ。倒れ込んだところになにがあるかわかったもんじやありません」

レンジエの講義を聞きながら、あたりを観察する。紐はかろうじて見分けられるが、その先になにが隠されているかなどさっぱりわ

からない。何の変哲もない、草むらが広がっているようにしか見えない。

「さあ、これからは戦場に近くなります。西には十分注意をお願いしますわ」

戦闘音が再開されても、フラウス・ホワイトは顔色一つ変えなかった。十数人残っていた兵士の数人を、森に入る前に倒れた者の回収にあたらせている。

「山賊にとつてはこれからが本番……といつても、人数もこちらの方が勝っている。多少手こずるだろうが、まあナギにとつてはちよつどいいだろう」

絵里がいるからだろうか、フラウスは涼一の話話をたまに振ってくる。どのような意図があるのか、顔からはわからない。

「死者はいないな」

「は、今のところ。重傷が二名、軽傷が五名。ほかの者は森に入っています」

「よし。こちらは九十、相手は三十だ。森に惑わされなければ盤石だろう。私も行く。この娘を頼む。怪我人と後方で待機しておけ」

「ま、待ってください！ 私も行くツス！」

それを聞いたフラウスが振り返ると、

その目が、

「今なんだと？」

あまりにも冷たく、睨まれただけで軽いショックを受けた。

わかつている。自分など役立たずの足手まといだ。戦う力もなければ身を守る力もない。どんな事故で死んでしまつかもわからぬ。連れていくメリットなど皆無。

しかし、近くの兵士から盾をはぎ取って、メガネの位置を直しながら、絵里は叫んだ。

「ま、松風サンが心配なんです、悪いツスカ！」

フラウスは……以外にも、ちょっと驚いたような顔で、あまりにもあっさりと盾を奪い取られた哀れな兵士に目を向けた。男がやはり驚きながら首を振ると、

「……では、肝に銘じておけ。死ねばそれまでだ。その盾を離すな。絶対にだ。その馬鹿力で持っていれば、少なくとも奪われることはなからう」

馬鹿力の意味を考えている絵里の隣に降りたって、フラウスは剣を抜いた。

「では行こう。五人来い。三人でコバシを守れ。ここらの賊は掃討したるうが気を抜くなよ」

歩き出す。兵士が蹴散らしたとは言え、矢の飛んでこない保証などいっさい無い中を悠々と。絵里はおっかなびっくり、鋼鉄製の、

どうみても三キロはくだらない盾に全身を預け、おっかなびっくり続いた。

最後の一撃が、彼と賊を隔てるたった一枚の障壁を破った。外の喧噪は遠くに遠ざかっていて、今はむしろ、この建物の中は静まりかえっているように見える。

「けっ。手間取らせやがって」

その男はいかつかった。プロレスラー顔負けの体を、ほとんどボロに近い汚れた衣服と胸当てでわずかに覆っている。同時に入り込んでくる熱気が部屋を急速に暖めていった。太陽の光が届かなかつたこの部屋はずいぶん冷え込んでいたのだろう。

そして男のほとんど半裸に近い格好は、この熱気の中ではある種当然の装いだ。

だが、むせかえるほどの蛮臭！

知性のかけらも感じさせない下品で汚い顔、細かい作業などと全く無縁のゴツゴツした手。丸太のような腕がついた、怪物のごとき体躯。

それが逆行に照らされ、のしのしと動いている！

気絶すらもできない。生存本能は、ここで気を失えば助かる望みなど一点もなくなってしまうことを知っている。

だからといって、動きようもないこの状況では、意識を失わないからといってなにができればよいものか。いや、体が自由であっても、なににもできない。

「この男が殺そうと思ったのなら、それは速やかに果たされるはずだった。」

「起きてやがったか。ま、ちょうどいいわな」

だが。

殺す前に、なにか考えているのであれば。

隆弥を見つけて、すぐに殺せばなんの問題もなかったのだ。

男は腰のナイフを抜いて、隆弥を縛っていたロープを断ち切った。

一瞬、助けてくれるのかと思った。

「動くんじゃない。殺すぞ」

そして、大きな掌で隆弥の両手首をつかみあげて、ナイフをベルトへ、

「!!!!!!」

なにをされるのか、それに思い当たったとき、隆弥の思考は爆発した。

「殺すぞ」

満面の笑みで、ベルトをも切る。その笑顔に安らぎなど覚えるはずもなく、声を上げることも叶わず、隆弥は絶望のうちにズボンをおろされた。

「泣くのは構わねえし、今なら声を出しても構わねえ。その方がいい」

今度はグツグツと声を上げて笑う。息が臭かった。

放り投げられ、荷物の中に倒れ込む隆弥。男は鼻歌を歌いながらのしかかってくる。

「や……やめ……」

目を見て懇願すれば、許してくれる……はずもなかったが、もはや隆弥に残された手段は一つしかなかった。おぞましい蛮族に良心の一片を期待するしかなかった。

だがそれは蛮族の欲を刺激するものでしかなかったようで……

尻になま暖かいなにかが押しつけられた時、今度こそ隆弥は悲鳴をあげた。

「それだよ、それ」

男はますます愉悦に浸っていき、自分の下から逃れようとともかく隆弥を両腕で押さえつけた。

「やめて！ 許して！」

「そうそう、もっとだ」

泣き叫ぶ隆弥の顔がそれほど気に入ったのか、しばらく男は動かなかった。もはや言葉かどうかも怪しい隆弥の懇願を受けた上で、

ただ笑っている。交渉の余地は全くない。

だが、それが結果的に、隆弥の貞操を救った。

隆弥の悲鳴が最高潮に達したとき……すなわち、隆弥のストレスが限界値に達したとき、彼の右目がまばゆい金色に輝いたのだ！

それを凝視した山賊は、即座に異変に気づいた。いや、どちらかというと山賊自体に異変が起こった。

山賊は飛ぶように隆弥から離れると、

「な、なんだお前ら、どっから沸いた！」

誰もいない空間に向かって、叫んだ。

隆弥はそれに気づかない。限界まで追いつめられた彼にまともな思考はできず、かすかに痙攣しながら、今は下半身まるだしのままほとんど気絶していた。瞳の輝きは、すでに消えている。

その前で、男はナイフを抜いた。

「み、見ねえ顔だな。正規軍じゃねえな！　なんでこんなところに！」

返事はない。が、

「こ、殺すのか！？　返り討ちにしてやるよ！」

と続け……

自らの首をかききって、血をまき散らしながら倒れた。

うつ伏せに二人。

高いところから茂みに隠れ、戦闘を見守っている。

涼一は先ほどから気が気でない。あたりの警戒はもちろん、まさかフラウス率いる正規軍が負けやしないか、クラスメートはどうなっているかなど、なにかから心配すればいいのかというありさまである。

「まだか……まだか」

小声で呟いていることに自分でも気づいていなかった。その隣でレンジエは、冷静に経過を眺めているようだった。彼らの潜んでいる坂の下に、木造の粗末な建物がある。おそらく根城の一部分で、ほかは山を掘って作られているようだ。

「あと少しですわ。我慢してください。へたうつと出てきた連中とかちあう」

わかっている。見えない入り口からは、断続的に賊が出てきているのがわかった。数人規模ですでに三回、森の中を器用に走っていた。

「用意のできたヤツから参加しているようですね。能なしっちゃこのことだ……さあ、そろそろだ。心の準備はできてますかい」

「いくのか？」

「さっきの連中が出てからしばらくたっている。二十数えましょう。その間に気をしっかり持つんですな。手が震えているの、気づいて

ますか」

言われて、反射的に右手を押さえた。気づいてしまえば、震えているのは手だけではない。足も肩も、立ち上がるのが困難なほど。

「それじゃダメですわ。深呼吸深呼吸。さっきも言いましたが、あつしは戦闘向きじゃない。なかで敵に会えば余裕はありません。自分のことは自分でどうにか、やってください」

「わかつてる」

深呼吸。どうにかみつともない震えは収まる。息を忘れていたため酸欠になっていたのだった。あまりにも……あまりにも情けない。

「立って。行きます」

「こわごとと立ち上がる。しっかり立っているのを見て、レンジエは笑った。一瞬だけ。涼一の肩をたたくと、

「その意気ですわ」

音を立ててはいけない。辺り一面が草や砂利などでそれは難しい。苦労しながら坂を下ると、砂烈団の根城のすぐ脇、入り口から死角になるところで様子を見ているレンジエに追いつく。

ここからは喋ってもいけない。

レンジエは驚くほど静かに、入り口まで移動する。建物の影に隠れて、涼一は彼を見送る。賊が戻ってくればすぐに見つかる。それを見張るのが涼一の仕事だった。

レンジエが中を確認している間、とくに動きらしいものはなかった。西の方では相変わらず剣戟の音が響いている。まだ戦闘は終わっていない。

合図。

涼一は、今度は全力で入り口まで走った。ここでのらりくらりしている暇は無かった。飛び込んでも安全なことを、レンジエが確認しているからできる行動だ。

根城の中に入って、二人で扉を閉める。ギイ、と軋んで、涼一は全身に冷や汗をかいた。気づかれはしなかったか。

レンジエの後に続き、静かに進む。入り口はホールのようになっていて、いろいろな物が乱雑に放り出されてある。教室ほどの広さの向こうに通路が続いていた。

足下は地面のまま、板と丸太を組み合わせた簡素な小屋で、すぐに洞窟になっているようだ。

あるいは、元からある天然の洞窟の入り口に建物をこしらえたのかもしれない。

洞窟のままの方が見つかりにくいと思うのだが。疑問を胸に、涼一は歩いた。腰の剣が音を立てないように右手で抑えながら。

わずかに進んだ先、やはり開けた場所にでる。ここは四方に通路が延びていた。

太陽の光はもう届かないが、たいまつのおかげで闇ではない。薄暗い中、壁に沿って右手の通路へ近寄る。

先は暗い。ぼんやりと火のないたいまつが見える。おそらく使わないときは明かりをつけていないのだろう。

レンジエを振り返ると、彼はゆっくりと腕を回した。

ぐるりと、一度すべての通路覗くつもりなのだ。明かりの漏れて

いるところもある。

そのとき、どやどやと数人が走ってくる音がして、涼一は戦慄した。

ぐらり、と絵里の体が傾いだ。素早く兵士たちが彼女を囲み、あらゆる包囲からの盾となる。奇襲と判断しての所作だった。

あらかじめ下知されたフラウスの指示であり、言葉とは裏腹に、彼女は異邦人を気にかけている様子である。

絵里が体勢を崩したのはしかし、矢で入られたからではない。両手で抱えた盾が地面へと刺さる。それに寄りかかりながら、彼女は混乱している。

言葉で表すのが難しい。あえて言うなら、彼女の目の前に突然、未知の光景が広がったのだ。

より詳細に書くのなら、今見えているはずの景色とは別の、木の上から森を俯瞰しているような構図が、突如目の前に現れた。思わず落下の危険を感じ、体を硬直させて、これだ。

周囲を見回しながら、フラウスは剣を構える。

「コバシ、怪我は」

「い、いえ、どうもないツス。いやなんていうか……」

今、彼女は盾を杖のようにし、かがんだ状態で地面を見ているはずだった。だが目の前はやはり違う。森の中にわずかに開いた広場を、見下ろしている。

なにがなんだかわからぬ。

「す、すみません、立ちくらみが」
「警戒を続ける」

フラウスは剣を鞘に戻し、絵里の顔をのぞき込んだ。もちろん絵里には見えない。

「どうした」

「え、ええと。説明しにくいんすけど」

その時、気づく。動きがあった。

定点カメラのように森の光景を移している彼女の視界、その左隅に、兵士が写っている。出で立ちに見覚えがあり……たしか、この兵士はすぐ目の前を歩いているはずの……

右側に、人影が現れた。

知らず、背筋に悪寒が走る。人影は、兵士に比べて非常に大きいというよりカメラに近い。となると木の上にいる。その人影はゆっくりと弓を構えると、矢を、

「上ツス！ 木の上に！」

反射的に、絵里は叫んだ。

迅速だった。素早く反応したフラウスは、兵士たちの影からあたりを見回す。

向かう先の木、その上に二人の山賊が潜んでいるのを見て取った。汚れとメイクでほとんど背景と同化していたが、わかれば見逃さぬ。

「オロス！ 貴様の前方だ、やれっ！」

そう叫んだとき、すでに彼女は部下の背中から短弓を引き抜いている。同じく部下の腰の矢筒から一本を抜き、迅速に射た。

砂烈団の射手より速かったのは、絵里の大声に狼狽したからだ。

目の前の集団は二人に気づいていないカモだ。見られた様子はない。それなのに、うずくまった一人が急に自分たちの場所を叫んだ。意味不明のことに、反応が遅れた。

一人の肩に矢が突き刺さり、バランスを崩して落ちる。

残った方は急速に思考する。どうすればここを逃れられるか。奇襲して大将首を取り兵士たちがうるたえている間に逃げ出すはずが、あつという間に臨戦態勢である。

程なく、先頭を進んでいたオロスが木を伝って逃げようとした山賊を撃ち落とした。

兵士たちが山賊をふんじばっている間に、絵里の視界は正常に戻りつつある。瞬きしたり手で覆ったりしながら、絵里はしきりに首を傾げていた。

「なにがあつた、コバシ」

「いえ、その、なんか、突然へんな光景が……あそこから下を見下ろしているような」

フラウスは山賊が潜んでいた木の上を見る。

「コバシ、お前はここに覚えはないか」

「は、覚え？ どこも同じに見えるツスけど」

「見る」

所々に見える、赤い染みを示す。赤と言うよりほとんど黒い。

血の後だと思われる。

「ここはお前とナギがドレマンに襲われた場所だ。なにか関係があるかもしれない」

足音が遠ざかった後、レンジエが顔を出した。涼一の心臓は早鐘を打っている。

先ほど、急にレンジエに突き飛ばされ、最初にのぞき込んだ暗い通路に押し込まれた。

暗いとはいつても扉などがあるわけではなく、山賊たちが注意をこらせばあつという間に見つかってしまったはずだ。

だが山賊たちは二人に気づかず、そのまま入り口へと走っていった。照らされた中で見たのは五人。尻餅をついたときの大きめの音は、どうやら彼ら自身が出していた騒音で聞こえなかったようだった。

もし見つかっていたら五人と戦わねばならなかった。

今までとは違う、ただ暑いだけではない汗が背中を濡らしている。立ち上がるうとしたとき、涼一の耳に何かが飛び込んできた。先に行こうとするレンジエの肩を掴む。

耳をそばだてる。泣き声のような、うめき声のような、かすかな声。この暗い通路の向こう側からだ。声の元を指さすと、

「よく気づいたもんですわ。明かりはつけないで行きます。手を離さないように」

ほとんど息だけで、レンジエは言った。涼一はうなずくと、ゆっくりと歩き出すレンジエの肩に手をおいたまま、ついていく。

途中で曲がった。通路自体が左に折れていて、十メートルほど先でさらに右に折れている。その向こうから明かりが漏れてきている。

角に到達し、レンジエがのぞき込む。

「動きがない。誰もいませんわ。入って扉を閉めましょう」

ドアを閉める。

「ここに一つドア。見てください、結構広い。ドアが六つ。おそらく倉庫ですわ。鍵とかがついてるところを見ると、普段は奪った物やらを入れてるんですわな。二手に分かれましょう。あなたは鍵のついてない、奥のからお願いします」

「わかった」

一番奥の扉は、鍵どころかドアも開きっぱなしだ。おそろくなくにも入っていないのだろう。

という涼一の予想は、とんでもない形で裏切られた。

のぞき込んだ涼一の目に、どういっわけか死体が目に入った。

でかい図体に半裸の薄汚い男、これは山賊の一人だろうが、なぜこんなところで死んでいる？

それに、その奥の小さな……小さな、少年は……

涼一は慌てて駆け寄った。自分のクラスメートだと祈りながら、そして全く動かない彼が、まだ生きていることを祈りながら。

途中で血だまりを踏みつけ、よろける。倒れ込むように飛びついた少年の、ズボンも下着も脱がされているのを見て、彼は慌てた。この部屋でなにが行われていたのか想像もしたくない。

とにかく生きていることを確認したい。黒い髪に、明かりが松明なためわかりにくいのが、色白。シャツの作りがよい。それにこの脱がされたズボンは詰め襟のもののようなのだ。

涼一は確信した。クラスメートに違いない。そうすると、泥だらけで頬の瘦けた顔が、見覚えのあるもののように思えてくる。

いた。確かにいたぞ。印象は薄いのが、わかりやすいオタクたる乱堂忍と遊んでいる、そうだ、余市隆弥！

「よ、余市、余市君だろ！ おいつ！」

頬をたたく。肩を揺する。彼もこの世界に来ていた。そして砂烈団につかまり、もしかして……性的な乱暴までも受けているかもしれない。

「生きてるよな！ 目開けるよ、余市、余市！」

「いたんですか、ナギ」

「ああ、こつちだ！」

入り口に向かって叫ぶ。そしてまた余市に視線を戻し、

彼の目が開いていて、

そして、右目が目映いほどに光っていて、
閉じる。

その瞬間、涼一は背後に気配を感じた。レンジエではない。彼よりももっと荒々しい、野蛮な息づかい。振り向いた。

入り口に、どこかで見たような巨体。というより、この山賊どもの見分けが、涼一にはあまりつかない。そいつがナイフを抜いて、笑っている。

レンジエはどうした！

殴りかかったが、避けられた。小部屋から飛び出すと、涼一は腰から剣を抜く。

練習などしていないが、もしも殺すことになったなら。手に残るあの感触はもう味わいたくなかった。

山賊の背後で、レンジエが驚愕に目を見開いているのが見える。

涼一は舌打ちした。さんざんえらそうな口をたたいて、気づきもしない！

あの筋力を信じる。ロツツを投げ飛ばしたときの、ドレマンを殴り飛ばした時の。

その力で相手を超えれば、どうにでもなる。

「おおっ！」

と叫んで、涼一は構えた剣を、両手で、山賊に突き刺した。
悲鳴。

そして、腹部に鋭い痛み。

なぜそうなったのかが涼一にはわからぬ。確かに自分の剣は山賊を貫いている。自分に向かって、なにもものも凶器を向けていない。

にも関わらず、刃物で刺されたようなこの痛みは何だ？

じわり、と腹部から血が染み出した。山賊ではなく、自分の腹だ。

涼一の視界が、徐々に書き換わっていった。

山賊が煙のように消え、その向こうで惚けた顔のレンジエが突っ立っていた。

突きだしていたはずの両腕は、なぜか剣を逆手に持ってた。しかも右手は刃の途中、左手は柄を握りしめているため、右手から血が滴っている。

そうしないと剣が長すぎたのだろう。

理由は全くわからぬ。だが、厳然とした事実がある。

涼一は、自分で自分の腹に剣を突き立てている。

「コバシ、お前に起きた出来事はあとで話そう。さっきの二人はおそらく、先発隊をやり過ぎし、私だけを狙ったものだ」

フラウスと絵里が砂烈団の拠点に着いたとき、掃討はほとんど終了していた。この拠点さえ抑えれば、砂烈団はしばらく大規模な活動ができなくなる。

あとは結界を解き、地元の地方軍に任せるといふ。

「將軍」

中からバウイエが出てきた。

「レンジエとナギを見つけました。レンジエは無事です」

「ま、松風サンは……」

バウイエの言い方が、絵里に不安を抱かせる。

「重傷です」

そのとたん、いてもたってもいられず、絵里は走り出す。

「おい、待て！」

フラウスの声も無視。とにかく突き進む、驚く兵士たちの間をくぐり、かきわけ、涼一の名前を叫びながら絵里は走る。

途中、暗いせいでなんども転びながら、ほとんど迷いかけていると、

「こっちですわ」

と、男が顔をだしてきた。精悍な顔つきの、若い男。ほかの兵士に比べて軽装だった。

「速く来てください。保つかかわらん」

なにが保たないというのだ。

若者に引つ張られ、倉庫に飛び込む。

同時に、目に入る血だまり。

「松風サン！」

上半身裸で奥の方に寝かされている涼一に駆け寄る。

その腹部にざっくりと穴が開いているのを見て、危うく失神しかけた。

隣にうずくまって、若者は言った。

「この部屋に入ったあと、急に剣で自分の腹を刺しました。わからんが、幻でも見ていたみたいですから……一応手当てはしてますが、剣は貫通していた。命の約束はできませんわ」

だから止めたのだ。

ただの高校生が、こんな戦場にのこのこと立ち入って、無事にすむわけがなかったのだ。

手を取ると、ほとんど冷たくなっている。

「松風サン、松風サン！」

「もう一人、あなたたちの仲間がいる」

今はそんなもの、どうでもいい。涼一が死んでしまう。

そこまで仲がよかったわけではない。ただ席が並んでいたただけだ。

だが、同じクラスで半年を過ごした。

このわけのわからない世界に来て、最初に出会った。

命も救われた。

彼が目覚めるまで気が気でなかった。

どれだけ彼に依存していたか。

「死んじゃダメです！ そんなの、そんなの」

こんなところで、まさか死ぬなど、あつてはならないことなのだ。

「おい、レンジエ」

フラウスの声が聞こえた。

「ナギはどうなのだ」

「死ぬかもしれせんわ」

「砂烈団か」

「いや、賊じゃない。理由はわかりませんが、自分でやりました」

その時だった。

絵里の握っていた手が、わずかに動いた。

瞼と唇が痙攣したように見えた。

そして、絵里は瞬きを忘れた。

彼女の目の前で、腹部に開いていた穴が、急速に閉じてゆく。まるで逆再生のように、めくれていた肉がつなぎ合わさり、継ぎ目もなくなり、何事もなかったかのように綺麗になり、

「ぐっ」

体全体がビクリとはねた。

口から、ごぼりと血が吹き出た。

「げっ、げっ！」

呆気にとられていると、レンジエが絵里を押しつけ、涼一の体を横に転がす。

血を吐きながら、しかし涼一は両腕を動かした。地面をついて、顔をしかめながら。

レンジエも、声も出ない。

「いてえ……」

腹部を押さえながら、涼一。

「ま……松風サン」

メガネがおかしくなったか。

絵里は、真っ赤に彩られた涼一の顔へ、手を伸ばす。

「こ、小橋、そこ、よ、よいちが」

「よい……ち」

「気をつけ……目を、見るな」

小部屋を振り返る。むせかえる血のにおい、その中に、大男と、小柄な少年が倒れている。

絵里が歩み寄ると、フラウスが後ろからついてきた。

少年は気絶していた。ああ、余市隆弥だ。同じクラスの、もやしつこの余市隆弥。

彼も来ていたのか。

「目を隠せ、コバシ」

フラウスが反対側に座り込み、手で隆弥の目を覆う。そのまま口元に耳をあて、

「生きているな。弱っているが、見たところ致命的な怪我もない。ただ全身に打撲痕がある。レンジエ、ナギはどうだ」

「意味がわかりませんわ。傷が完全にふさがってます」

その後のことはよく覚えていない。

気がつけば元のキャンプに戻ってきて、出された水を飲んでいる。テントの中にはクラスメート。依然と同じように松風涼一と、以前とは違いもう一人、余市隆弥。

「落ち着いたか」

座り込んで惚けている絵里の側に、フラウスが座った。

「戦いは終わりだ。これから結界を解いて、我らは城に戻る」

「城？」

「ノルオートだ。二日の距離だな」

「……あの、二人は」

何度も言われたが、それでも気がかりである。

「わからん……あ、いや、命に別状はない。ナギはよくわからんが、傷は完治している。おそらく貧血で、しばらくは安静にする必要があるが。もう一人はかなり衰弱しているが、目が覚め次第、なにか食わせてやれ」

「……」

「少なくとも、彼らが完調に戻るまでは城で過ごすがいい。その後の話はそれからだな」

絵里は最後まで聞いていなかった。

緊張の糸が切れたのか、この恐ろしい世界から逃れようとしたのか。

とにかく、水の入った碗を落とし、フラウスに寄りかかるように、彼女もまた気絶してしまった。

「どーもッス」

愛敬のある笑顔で礼を述べる小橋絵里。

涼一はため息をついた。中間試験の合間、なにを話しかけてきたかと思いきや消しゴムを忘れたとのことである。自分のものをちぎって渡したことで、どうにか乗り切ることができそうだった。

涼一は試験よりも、二週間後に控える県大会に向けてのイメージトレーニングに集中している。三年生最後の大会だった。200メートル走は後輩の実力者も参加する。ヘタをすると、決勝にすら残れないかもしれない。

隣の席の佐伯いつなは、次の科目である英語に向けて、最後の英単語チェックを行っていた。ほかの生徒も同様で、やたらに余裕のある越知が誰彼構わず話しかけているのを除けば、みんなマジメに試験に取り組んでいる。

涼一は、あまり成績がよくない。

その分を陸上で稼いでいる、といえば聞こえはいいが、要するに体力バカなだけだった。その体力も、相撲部やアマレス同好会の筋肉自慢とは比べるべくもない。

だから速いことだけは誰にも負けたくなかったのだ。せめて走ることだけは。

「おう、松風」

寄ってきたのは炎条寺陽之である。

「やっぱり、試験に集中なんて無理だよなー」

教科書もノートも開かずにぼけっとしている涼一を見て、そう言った。

「二人とも県大会出るんだっけ？ 弓道部は男子が応援しに行くんだってさ」

藤堂美子が口を挟んできた。

「私の代わりに応援するようにしておく」

「いやいや、女子弓道の応援に行くんだろ？」

美子は首を振ると、

「今年、陸上が大本命だからね。こっちは僻地だし、近場でやる陸上の応援にいくように言われたって」

「んなアホな」

陽之があきれるのももつともだ。自分のところを応援しないようにと通達される部活動など初めて聞いた。

「いや、確か奈良が県大でるだろ」

「奈良君は、だから私たちと一緒に。でも応援はやっぱり陸上」
「マジか」

涼一は教室の反対側で奈良星光に目を向けた。英語の教科書に集中しているようだ。

「ま、校長の方針らしいから仕方ないけど」

と、ブツクサ言っているのは納得していない証拠である。涼一たちも気持ちにはわかる。

目が覚めた。

涼一はむくりと体を起こす。最近はいつの間にか気絶しっぱなしだ。石造りの壁を見るに、まだ神奈川には戻っていないらしい。

ここはどこか。

やはり堅いベッドから降りると、体の汚れが拭き取られているのがわかった。硬い布地の寝間着のような物を着せられ、床には革の靴が置かれている。

どこかの施設のようだ。

部屋は驚くほど狭く、ベッドの脇に小さなテーブル、それだけで面積の半分以上を占めている。本当に寝るだけの部屋。

壁に学生服がかけられていた。

涼一はしばし考え込んだ後、着替えることにする。衣服ぐらいい元の物を着ていないと、なんだかこの世界に引きずり込まれそうな気がして気味が悪かった。

小橋絵里と余市隆弥はどこだろう。

とはいっても、特に心配していない。涼一がこのような扱いを受けているのだから、二人に命の危険があるとは考えにくい。なんだかんだでフラウスたちは見えず知らずの涼一をサポートしてくれたし、誠実に扱ってくれているようだ。

なぜかはわからないが。

寝間着を脱いで、ふと顔に手をやると、じょり、と髭にふれた。それほど濃い方ではない。が、少なくとも三日はほったらかしだから、ずいぶん伸びてしまっていた。

剃りたい。いそいそとズボンを脱ぎながら考える。先ほどから違和感があったのは、下着をつけていないからだった。

だから、涼一は丸裸にならざるを得ない。

事前に可能性を考慮する必要はあったが、ドアが開いたのはまことに不幸としか言えなかった。

がちやり、との音に、涼一は硬直する。

相手も硬直する。

メイドが立っている。

うら若き、というより幼い、女の子の、小さなメイドが立っている。手には水差しとコップ。

涼一とメイドは相對している。

念のため再度描写すると、涼一は裸である。

メイドの手がぶるりとふるえて、水差しから水がこぼれた。

「あ、その、」

涼一が何か言おうとしたとたん、耳をつんざく悲鳴が上がった。

飛んできた兵士たちにも裸を見られた。

詰め襟を着込んだ涼一は沈んだ気分のままベッドに座っている。入り口には、先ほどあられもない姿を見られたメイドが。

「申し訳ありませんっ。の、の、ノックもせずにつ！」

先ほどの悲鳴に負けぬ甲高い声が頭を突き刺す。炎条寺陽之に負けぬ大声だ。部屋が狭いので特にうるさい。

「いや、いや、俺の方こそ鍵もかけないで」

「こ、この部屋に鍵はついていないのでっ！　まだお休みとばかりっ！」

そこからしばらくあだこつだと言い合う。話題が自分の裸についてであることもさることながら、それでメイドが客人に対する無礼により処罰云々の話に気が重くなる。

「俺は気にしてませんから」

年端も行かない少女にナニを見せつけてしまった罪悪感の方が大きい。

「あ、あ、あの、お目覚めになったらホワイト將軍のお部屋までお越しいただきたいとのことですので！」

「ホワイト將軍……ああ」

「そそそそれではっ！」

「あ、いやちよっと」

すごい勢いで振り返り逃げようとしたメイドを呼び止めて、

「將軍の部屋、どこですか」

ということ、気まずい中、メイドに案内されて廊下を歩く。無骨な作りで狭いが、ところどころに備え付けられている窓から日光が差し込んでいるので、暗くは無い。ガラスはまっぴい

恐る恐るメイドの名前を尋ねると、リユリとの返事。涼一が気絶していた間の世話役だったという。ちなみに彼が眠っていた期間は実に四日であった。

一週間が経過している、という事実、彼は暗澹たる思いに捕られる。家族は心配しているだろうか。彼だけではない、同じく小橋絵里や余市隆弥も、神奈川から消えている。

「コバシ様はホワイト將軍のお部屋にいらっしやいます。ヨイチ様はお体の具合が良くないので、まだお休みになられています」

あちらこちらを行ったりきたり、階段を上ったり降りたりしている。まさか迷っているのかと疑い始めると、ドアの前でリユリは止まった。

こちらがホワイト將軍の居室です、とのことだ。

「ホワイト將軍、ナギ様がお目覚めです。ご案内しました」
「入れ」

簡素な作りのドアを開けると、教室の半分ほどの部屋だった。十人ほどが囲めそうな机と椅子、その一つに絵里が座っている。窓際には別に一人用の机があって、フラウスが何かを書いていた。

「松風サン、具合はどうっすか」

絵里がメガネを直しながら、愛敬のある笑みを浮かべる。その顔が妙に懐かしくて、涼一の緊張もほぐれていく。リユリが部屋を出ていった。

「心配かけてばっかでごめん。なんともないよ、腹も」

絵里は少し反応に困った様子だが、涼一とて同じである。自分の体になにがおこっているのか説明がつかない。

「後で余市サンにも顔を見せてあげてください。その、まだ混乱してるみたいで」

言いよどむ。余市隆弥を見つけたときのあの惨状は思い出したくもなかった。

フラウスの手が止まった。

「体調はいいようだな。食事を用意させている。が、その前に少しだけ時間をくれ」

「はい」

フラウスに促されて座る。彼女は今は鎧も着ておらず、動きやすそうなシンプルな衣服だった。美しい目も、最初に会ったときに比べて幾分か柔らかい。

「まず興味は無いだろうが、砂烈団の掃討が駐在軍によって完了している。協力を礼を言おう」

とはいっても、涼一は敵と戦ったわけではない。

「コバシにはすでに説明してあるが、ここはノルオート城塞というシュミット軍の最北領だ。お前たちをしばらくここで保護する」

頷く。

「ヨイチはしばらく安静にする必要がある。幸い、重傷ではなかった。性的な虐待も受けていない。が、精神的にかなり参っている。私たちにも怯えている始末だ。今のところコバシとしかまともに話せる人間がいない。ナギもできるだけ側にいてやってくれ」

「わかりました」

「それで、ヨイチと接するにあたって注意事項がある。彼の右目を見てはいけない。念のため眼帯をつけているが、隙を見て外そうとするのだ。特に右目が光った場合が決して直視するな。幻覚を見る」

幻覚。涼一は腹をなでた。

「死んでいた砂烈団も、お前も、おそらくその幻覚にあてられて自分を傷つけたのだろう。今のところ世話役にも一人被害が出ている。眼帯をつけているよう、説得してくれ」

とは言うが……その、右目が光り、それをみた者に幻覚を見せるという力など、なぜ隆弥が持っているのか。信じられない。

「お前たちには不思議な力があり、それを認識できていない。それについては、もうすぐ到着する者を交えて検討する。それまでは自由に過ごしてくれていい。だがこの砦に詰める人間の中にはお前たちを知らない者もいる。派手な行動はしてくれな」

「これから来る人間？」

「ああ。黙っていて悪かった。実はお前たちのほかにカナガワから来た人間を、すでにシュミット城で保護している」

聞き違いかと思い、涼一は首を傾げた。

「カザマ・ライタ」

涼一と絵里の説明に「信じられん」と反応したのは、風間雷太のほかに、同じ場所から来たという人間がいたということが信じられなかったから。

絵里に「当てがある」といったのは、風間雷太がすでに、超人的な力を見せていることからだった。

そして虚言かどうかを確認するため、涼一を煽り、戦闘に参加させた。

「だから、お前たちの仲間ももたら助けのつもりでいた。騙してすまない」

ギリギリのところ、涼一の怒りは沈静化する。

すべては終わったことだ。危うく涼一は死にかけたが、結果として死んではないし、絵里も隆弥も生きている。

それに今は怒る気にもなれぬ。

「カザマは明後日には到着する予定だ。来たらいろいろ尋ねるといい。お前たちの名前はすでに伝えてあり、知り合いだと確認が取れている」

その後、食事の前に隆弥の様子を見に、部屋を訪れた。

リュリに促されて狭い部屋に入ると、ベッドの上で隆弥がびくりと震える。

「あ……あ、ま、松風くん？」

「よっ」

「おはようツス、余市サン」

彼の右目にはしかつめらしい、洒落つ気の全くない地味な眼帯がある。

涼一は、自分にあてがわれた部屋の倍ほどの、採光性のよい部屋の中を隆弥に近づいた。ベッドの側の椅子に、絵里と並んで座る。

隆弥の顔は、日光の中で見ると哀れなほどにやせ細っている。食事もあり手をつけぬとのことだった。絵里によると、この世界の食べ物怖がっているようだ。

「大丈夫か。怪我とかは」

「あ、うん。ちょっと青胆ができてるくらいで、特には……松風くん、ありがとう」

「……？」

「助けに来てくれたんだって、小橋さんが」

「小橋も行ったろ？」

「私、なにもしてないツス。もう戦いは終わってたし」

フラウスによれば、隆弥は自分の力に気づいていない。涼一を傷つけたのが自分だと気づけば、余計なストレスにさいなまれるという判断だった。伝えてしまった方が眼帯についておとなしくなるのではないか、という意見もあるが、伝えるかどうかの判断は涼一に任されている。

しかし、こんなにも憔悴している隆弥に、伝える気は起きない。伝えるにしても、元気になってからでよい。

「余市くん、あんまり食べてないんだってな。体調よくなるまで」「あ……うん、食べなきゃって思っただけ……」

「俺と小橋なんか、目がさめて出されたお粥、すげえ食ったのにな」
「私は松風サンほどガツガツしてなかったツス。一緒にしないでください。まあ食べましたけど」

笑う。

「アレだったら一緒に食うか。一人じゃ食べる気も出ないだろ。俺も腹減ってるし」

思い立ったら、断られる前に行動である。隆弥が食べて元気にならねば、先のことを話すこともできぬ。せつかくのクラスメートを抜いて、先のことを話す気はない。

扉の外に立っているリュリのところに行くとき、

「中に鈴がございましたでしょう。鳴らしていただければ伺います」
扉の側にいることがわかっていいるのだから鳴らす必要もないだろうに。それに、隆弥はこの世界の人々も恐れているようだし。

「は、お食事はこちらですね」

用件を伝えると、リュリは頭を下げた廊下を歩いていってしまつ。涼一たちが話していると、ガラガラと音がなつて、

「お食事をお持ちしました」

リュリの声だった。

部屋の小さいテーブルいっぱいにごとごとの皿が置かれていく。その様子を三人は呆然と見ていた。

「さ、さすがに多くないか」

「ナギ様は血を多く流されていますから、精のつくものをとの仰せです。コバシ様には好きなスープを、ヨイチさまにはご負担にならぬものを」

ではこの半分が涼一用か。肉肉肉。いくら腹が減っているとは言え、四日間寝たきりだった人間にだす献立ではない。見るだけで胃がもたれてくる。

「というか小橋、もう好物なんかあるのか」

「このスープ、ユラ草からダシをとってるらしいツスよ。塩気が利いててわかめスープっぽいです」

とにかく、食べよう。

なんの肉か知らないが、もはや涼一はフラウスを疑うことはしない。この世界で、すべてを疑ってしまったては生きていけないことがわかった。フラウスの善意を疑うと依るべきところがなくなってしまうのだから、信じるしかなかった。

鳥肉に思える。筋張ってはいるが、なにかのソースがかかっているようで、うまい。ユラ草のスープとやらを絵里からもらい、水差しの水と交互に流し込む。主食として白米がほしかったが、固いパンで我慢。

「うまいぞ。余市くんも食べよ」

「あ、うん」

恐る恐る粥に手をつける隆弥。

リユリはやはり扉の外にいる。

高校のクラスメート三人だけ。この世界にきて、やっと心から落

ち着けた気がした。

朝。

涼一は皆の外を歩いている。

うろついている兵士たちから奇異の視線を投げかけられることもあるが、萎縮していてもしょうがない。四日気絶し、一昨日、昨日とダラダラ過ごした。さすがになまっていてる体に血を巡らせようと、早起きしてランニングのつもりであった。

吸水性のいいシャツ、などはない。暑いのもあって、上半身は裸である。

「そっいや、飢餓並に痩せてるんだっけ」

とはいっても、涼一の普通がこうだ。仕方ないではないか。と聞き直って、借りた動きやすい半ズボンに足を通し、走り出す。

「お前たちを皆の外にだす許可が下りない。おそらくシュミットの上層部は、お前たちが逃げる可能性を考慮しているのだろう。すまないが、内側で我慢してくれ」

フラウスは昨日、そう言った。

なのでできるだけ外側、塀にそって走る。ノルオートは高台にあるようで、風が気持ちよかった。とはいえ、日差しは強いので日射病には注意しなければならぬ。幸い早朝でもあるし、暑さが本格的になるまえに切り上げればよいだけだ。

数えながら、端から端まで。体感では400メートルほどだ。そ

こから折れて端まで、500メートルほど。となると2平方キロメートルほどの砦だが、これが広いのか狭いのか、涼一にはよくわからぬ。

一周だいたい1800メートル。二周もすれば朝の運動としては十分だろう。

走りながら、考える。なんども考えたことだが、やはりここは日本ではない。地球でもない。シュミットという国も初めて聞いたし、こんな中世フアンタジーなど映画かゲームの世界観だ。それに相変わらず、太陽は二つ。

では、涼一たちはなぜこんなところに来てしまったのだろう。

地震があつたことは覚えている。忘れたくても忘れられぬ。

地震があつて、急速に日が沈んで……そうだ、まったく尋常ではなかった、あの瞬間。

なにが起こつたというのか。

それだけではない。涼一たちはいかにして、神奈川へと帰ることができのだろうか。

船をこいで海を渡ればいいというものではない。さっぱり戻る手段が想像できない。こちらにどうやって来たのが不明なのだから当たり前である。

二日間、この砦で過ごし、わかつたことがある。三人の中では、涼一が精神的に一番マシなようである、ということだった。

絵里は表面上、平静を装っているが、一昨日より昨日の方が笑顔が少ない。おそらく今日はもっと少なくなっている。見知らぬ場所で、帰れるかもわからない状況に神経をすり減らしているようだった。

た。

隆弥については言うまでもない。世話役のリュリとはかろうじて話すようになったけれど、それ以外は全くダメだ。料理も涼一たちと一緒になければ食べられないし、部屋から出ようとしない。

傲慢かもしれないが、涼一は絵里ら二人をどうにかサポートしたいと思う。一番マシなのが自分であれば、当たり前だとも思う。

「ナギ様」

呼び止められると、リュリ。

「朝からどうなさいました」

「ちよつと運動を。ホワイト將軍には許可もらったんで」

「運動、ですか」

目を丸くするリュリ。外に出たがらない二人と比べたのだろうか。

「ホワイト將軍がお呼びです。カザマ様がお着きになりました」

涼一の足が止まった。

「ヨイチ様のお部屋でお待ちいただくようにと」

というわけで、涼一は絵里、そして起きたばかりの隆弥とともに待っている。

「風間サン、も来てるんツスね。なんか、聞いたただだとふんわりした印象だったんすけど」

とは絵里の感想である。

ドアが開いた。立っていたのはフラウス・ホワイト。

「早くからすまない。カザマがどうしても会いたいとのことだな。入るぞ」

フラウスが部屋に入ると、隆弥が毛布を引き上げて壁に寄った。まだ怖がっている。

そしてフラウスの後ろ。

やけに背の高い、美青年が続いた。

眼鏡をつけたところは見たことないが……まごうことなき、高校の詰め襟に身を包んだ風間雷太だった。

「……ほ、本当に風間か」

雷太はしばらく、無言で涼一たち三人を眺めた。そして、大きいため息をつくど、

「松風、余市、小橋さん。会えて嬉しいよ」

柔らかく微笑んだ。

「コンタクトがダメになってさ」

といいながら、スープを飲む。少し早いが、朝食を取りながら話そうとの雷太の提案である。

フラウスは仕事があると、自分の部屋に戻っている。

「貰ったんだ。こつちで着る用の服も貰ってるんだけど、松風たちと会うなら制服のほうがいいと思って」

風間は笑いながら、隆弥にも食事を促す。

「俺はもう一ヶ月食ってるけど、どうもなってるないよ」

「い、一ヶ月？」

「ああ。俺がここに来たのは一ヶ月前だよ。將軍の話だと、松風たちは十日前だっけ？」

頷く。といっても涼一の体感では三日ほどだが。あとは気絶していた。

「そうか……三人が同じ時に、俺だけが早く……」

「なんか余裕あると思ったら、それっスね」

「話は聞いたよ。ずいぶん危なかったらしいじゃないか。俺は『出た』のがシュミット王城のと真ん中で、まあ、死にかけたっっちゃ死にかけてたけど。次から次に衛兵が沸いて、あげくは魔法士とか騎士とか將軍とか出てきて」

なんでもないことのように話しているが、聞いているだけで恐ろしいことのはずだった。

「よ、よく無事だったな」

「松風たちにもあるんだろ？ 不思議な力」

「風間サンにもあるッスか？」

涼一は絵里を見た。特に話しはしなかったが、今の言い方だと、絵里にも何らかの超能力じみた力があるということか。

「あるよ。わかりやすい、ハデなのが」

とたん、涼一の頬を、そよ風が吹き抜けた。

「……？」

思わず頬にふれる。いや、さつきも風は吹いていた。今まではとくに感じなかったが、屋内だからといって風が入り込まないということはない。

しかし、風間の笑顔が、先ほどと違って多少嫌らしいものになっている。

「それ」

「ひゃっ!？」

絵里の悲鳴。ガタリと飛び跳ねて、両手で背中をまさぐっている。

「く、く、首っ。気持ち悪いっ」

風間は笑い声をあげ始めた。

「や、ごめんごめん、悪かった。そこまで敏感に反応するとは思わなくて。でもまあ、わかりやすいだろ？」

「……え？ 風？」

声を上げたのは、隆弥だ。雷太は頷くと、

「名は体を表すって、このことだな」

と続けた。

「理屈はわからないけど、俺は風を自由に起こすことができる。これで衛兵とか騎士とか吹っ飛ばしてやったよ」

やはり何でもないように話すが、しかし涼一らは最初は自分がそんな力を持っていることにすら気づかなかった。

「まあ、言ったとおり俺のはわかりやすいからね。ゲームでいう風属性って。それに、身体能力もだいたい上がってる。この一ヶ月で自分の力をいろいろはかってみたけど、一般兵士くらいなら負けなげ。一般兵士つても見た目はゴリラか熊みたいなのはつかでさ。てか俺も最初は加減がきかなくて、そよ風みたいにできるようになったのはつい最近で、」

「ちょ、ちょ、たんま」

雷太は流暢に話すが、涼一にはついていけぬ。ゲームの話ではないのだからして、

「おかしいと思わないのか？」

「なにが」

「こんな変なところにきて、いきなり変な力がついて」

「おかしいとは思っさ。でも、実際なってるんだからな」

言葉もない。

「松風たちも一ヶ月くらい過ごせばなれる。俺、一人きりだったけ

「どんなだし」

「帰る方法とか、わからないのか」

「わからない。探してはいるけど。ていうかこっちの言葉わかんないから、本とか読むのも一苦労でさ」

「言葉、わからない？ 話してるだろ？」

「確かに日本語には聞こえる。でもそれ、あくまで日本語に聞こえるだけだ。実際には、独特の言語でしゃべってるんだ。相手からしてみれば、俺たちがむこうの言葉をスラスラ喋ってるらしいぜ」

理解が追いつかない。

「まあ、それは実際あとで試してみたらいいさ。こっちの言語は、使ってるのはほとんどアルファベットで、文法もドイツ語に似てる、けど発音が独特で……いや、まあ俺がいたいのは、地球じゃないってことだよ、ここ」

何でも無いように喋る。風間のこの話し方は、時には頼りになるが、時には冷酷にも聞こえる。

風間は頭もいい。冷静に物事を判断できる（式家については例外）。もちろん間違いだってするが、彼が言うのだから間違いない、という空気がある。

だから、涼一の気分も沈んでいく。とどめを刺されたような感じだ。

「それで、確認したいんだけど、松風たち、いつここに来た？ いや、なんていうか……そう、俺がここにきたの始業式の日なんだ」

「俺も」

「私も」

「僕も」

と、ここは全員同意である。すると風間は、

「地震はあった？」

頷く。

「じゃあ、やっぱり始業式か。それでこっちに来たのが俺だけ早い…
…やっぱりわからないな」

「でも、ちよつと待ってほしいッス」

絵里が言う。

「もしかして私たち以外にも来てるかも」

涼一と隆弥が、絵里を見た。

風間は頷くと、

「来ててもおかしくない。ここに四人いる。シュミットだけでもそ
うなんだから、ほかにも来てそうだ」

「来てるって……マジで言ってるのか？」

「マジだよ、松風。俺はここに来る途中、ずっと考えてた」

続ける。

「俺たちの共通点、わかるだろ？」

そんなのわかるに決まっている。高校の同級生だ。

「もうちよつと狭い……三年三組だよ」

涼一の脳裏をよぎる、秋月有紀の顔。炎条寺陽之、藤堂美子、越知知宏、波田野由香里、久住栄一、佐伯いつな。

まさか、まさか……。

「ほかに誰か来てるなら、少なくとも三年三組の連中だ」

まさか、36人が。

「だけど、これも予想でしかない。はっきりしてるのはこの四人だけだ」

雷太は続ける。

「俺がここに来たのは、もちろん松風たちに出会ったためなんだけど、シュミットから命令されてのことでもある」

シュミットから命令。

「松風たちの能力、それをはっきりさせておきたい」

「能力って、風間の風みたいなの？」

「ああ、そんなもんだよ。俺は『越境能力』って呼んでる」

「なんだって？」

「越境能力」

「あ、それって」

と、反応したのは意外にも隆弥。

「ジョーダン・マルダヴィスの」

「余市も読んでたんだ、アレ。小説だよ、SFの」

「SF小説とその越境なんか、なんだって？」

「マルダヴィスの小説に出てくる超能力のことを越境能力って言うんだ。ちょうど、俺たちと同じ境遇にあった人間が使えるようになる」

風間の説明によると、こうだ。

世界は、人間たちの認識している宇宙だけでなく、まったく異なる別の宇宙がいくつも存在する。通常、それらは独立した別個の世界を築いているが、時折、原因は不明ながら、それぞれの世界がつながることがある。マルダヴィスの「異世界」という小説の主人公は、地球とつながった全く異なる世界に漂流してしまう。その際に得た力が越境能力といい、彼は手をふれずに物を動かすサイキネシスのような力を駆使し、生き延びようとする。

「その話だと、異世界にわたった時に主人公の脳の一部分がわずかにずれて、そんな超能力を扱えるようになった、っていう説明になっている。いや、勘違いするなよ。俺たちに同じことが起きたっていうんじゃないくて、あくまで境遇が似てるっただけだ」

そこから、風間は手に入れた力を越境能力と名付けた。

「だいたい聞いている。松風は驚異的な治癒力。腹に開いた穴がすぐにふさがったって？ 小橋さんは遠視。検証しないとよくわからないけど、聞いた限りじゃ、一度自分がみた景色をどこからでも見ることが出来る。それで、余市は」

「おい」

と涼一は止めたが、隆弥がさらに止めた。

「……余市は、右目。右目を見た人間に、幻をみせることができるみたいだ」

隆弥は、あきらかにショックを受けているようだった。

「……やっぱり松風君が怪我したのは」

涼一は焦る。一昨日は知らなかったはずだが。

「私が言ったツス。松風サン」

「ど、どうして、」

「余市サンに言われてツス。眼帯の理由、松風サンが大けがした理由。最初は断ったツスけど、それで逆に感づかれちゃって。だから、だいたい自分で気づいたみたいツスよ」

話す絵里の表情も重い。隆弥にしてみれば、風間に言われて再確認といったところか。

「ただ、今は光ってないと聞いている。外してみたらどうだ」

雷太は言ったが、隆弥は首を振った。

「……まあ、最初は俺も風が止まらなかったし、こればかりは慣れだな。松風はとくに生活に支障はなさそうだけど」

「うるせえ」

「それで、後で將軍から話があると思うけど、余市が動けるように

なったら、シュミットに移動する。国王に謁見だ」

「風間雷太は立ち上がって、両腕を広げた。

「ようこそ、ヴェリーペアに」

- 2 (後書き)

あと2、3話ほどで第一部、というより導入部が終了し、その後登場人物まとめや既出の世界観の補完を行います。もう少し、五里霧中な松風達の混乱ぶりにおつきあいください。

風間雷太はそのとき、カフェ・ボヘミアンにいた。

向かいには野乃上恭平。二人してセンター試験の過去問題集を開いている。学年で上位の成績を誇る二人は、よく一緒に喫茶店で受験勉強をする仲だ。家が極端に近かったのが主な理由であった。

二年から同クラスの野乃上恭平は、しかし一年からの知り合いである。入学初日の下校時に、ほとんど同じ道を歩いていたのにお互いで気づいた。俺の家ここ、俺はそこ、というのが初めての会話で、思い返せば妙な内容であった。

現在、二人はセンター試験に向けての最終調整に入っている。この時期になると塾の自習室は満員御礼で、落ち着いて勉強もできない。平日の昼間の喫茶店は人も少なく、また常連の二人には店長も協力的で何時間いても文句を言わない。何より二人の家から徒歩十分の場所にあるのがよい。

実際のところ、雷太も恭平も、センターの過去問などやり尽くしている。であるから今の時間は、お互いの認識を確かめ合う一種の儀式のようなものだった。

「問題ないと思うよ、俺は」

雷太はコーヒースプーンをすすりながら言った。砂糖三個の甘党用。

「俺はやっぱ世界史だなあ。日本史にしとけばよかった。なんとか又スなんとかウス多すぎて、一年からわかんね」

「そりゃ日本史も似たようなもんだろ」

「漢字とカタカナは違えつすよダンナ」

二人ともホームルームが終わり次第、このカフェに來た。恭平などは彼女の誘いを断つてきたのだから、二人の友情というか妙な仲間意識の強さがあらわれている。特に約束もしていなかったのに。

「でも雷太、法学部なんだからさ。余裕ぶっこいてると痛い目見るかもよ。森部、この前の模試で半分泣いてたし」

「いや、森部は俺よりいいとこだから、確か」

「法学部のいい悪いってそんな変わるべ」

「ていうかそんな不吉なこというなよ、こんな時期に」

「滑る、fail。落ちる、fail。こける、fail。つまずく、fail」

「やめるバカ」

「単語の確認ツスよ」

「失敗の意味でそんな単語ださねえよバカ」

悪い悪い、と恭平は笑う。タチの悪い冗談を言うくらいには、恭平も余裕があるようだった。

それを指摘すると、

「いや、実際のところそんなに。なんかこれで高校も終わりかーって夢心地でさ。まる子とも別れるだろうし」

「なんで？ ケンカしたのか？」

「いや、あいつ九州行くからさ。半分が留学生のとき」

遠距離は嫌なのだそうだ。まる子とは外丸順子のあだ名で、恭平が誘いを断つた彼女のことだ。

「お前もさ、どうすんの」

「なにが」

「いや、式家さんのこと。京都だろ？」

内心ギクリとするが、感情を悟られないように平静を装うのが雷太の特技だった。

「ほら、その顔。式家さんの話がでるといつもそうなる」

特技だと思っていたのは本人だけのようだ。

「なんでまひ、式家の話になるんだよ」

「ええー、この流れでそれっておかしくないスカダンナ。何年やってんスカダンナ」

「いやいやいや、式家がでるのがおかしいだろ」

風間雷太が幼なじみの式家麻尋に恋いこがれているのは彼だけの秘密であり、実際は万人の知るところとなっているのは前述のとおりだ。雷太本人は自信の胸の内に秘めているものと思いこんでいるので、あっさりとは看破されたことにはうろたえている。

「今のうちにツバつけとかなないと、京都は誘惑多いツスよ。たしか式家さん、今まで彼氏いなかったから。誰かのせいで。耐性ないでしょ」

「お、俺になんの関係が」

「告白しときなさいって言うてるの。オーケー出るよ。二人とも受験生だからね。あんま直前はどうかと思うけど、センター終わった後にでもさ」

京都ならそんなにかからないし、と付け足す。

「まる子が探り入れたことあるんだけど、式家さん、遠距離もとくに気にしないらしいし。風間とならお互い浮気もしないしで万々歳」「いやそのな、なんで俺が麻尋のことをす」

ドン、と地面がはねた。

「きつ!?!」

舌を嚙んだ。

雷太の頭は、即座に麻尋の安否について思考を巡らせる。目の前で、やはり恭平が仰天したようにコーヒートをこぼした。

地震だ。しかも並大抵の物ではない、直下型の。

同時に、空が急速に暗くなっていく。激しく揺れるテーブルにしがみつきながら、どうして携帯電話の緊急地震速報が鳴らなかったのか、式家麻尋はどこにいるのか、父親は、母親は、妹は、大丈夫か、それよりも自分が大丈夫なのか。

なぜ空が暗くなる。

思わず、雷太はテーブルから腰を浮かせた。

そして、彼は見知らぬ場所に立っていた。

「……あれ?」

気がつけば地面は揺れていない。いや、と雷太は素早く状況把握につとめる。恭平がいない。ボヘミアンの店主もいない。どころか、ここはボヘミアンでもない。

あの狭苦しい、今時珍しくタバコの臭いが流れる喫茶店ではない。

地面は石。大理石の用で、ただっ広い。色彩に満ちた、さながらヨーロッパに建てられた宮殿のような場所だった。天井は高く、装飾は華美で、高級さをウリにしたショッピングモールを思い出す。

「な、何者だっ！」

叫び声が響いた。音響がよいのかよく響いている。見れば、冗談としか思えない格好の男が二人、巨大な門扉の前にいた。金属の甲冑に身を包み、手には物々しい槍を持っている。

なんのイベントだろう、と雷太は考えた。しかしそんなことをしている場合ではないはずだ。地震が起きて、今は収まっているようだが、避難にしろ警戒にしろ、とりあえずコスプレだとして、そんな長物を持っているのは危ない。

ばたばたと足音がする。がちやがちやと金属音もする。雷太はあつという間に、似たような連中に取り囲まれた。

ここはどこだ。

「貴様、どうやって入り込んだ！」

「魔法士かもしれん、気をつける！」

「王城に単身乗り込むとは愚かな奴め！」

騒ぎ立てる男たち。とりあえず、雷太は彼らを『兵士』と考えた。どうみてもなりきっている。

「いや、その、気がついたらここにいたんですけど。もしかしたら避難してきたのかも」

と、歯切れが悪いのは自分でもよくわかっていないせいだ。逃げてくる間の記憶が飛んでいる可能性もないではない。そう思うと、恭平を見捨ててしまったのかと情けなくなる。

「ほざくな！」

兵士たちは叫ぶが、近づいては来なかった。槍を構えたまま次々に声を上げている。

弁解するにしても、一刻も早く恭平や麻尋の安否を確認したい。ポケットに入れていた携帯電話に思い当たった雷太は、とりあえず確認してみることにした。この状況をすぐさまどうにかできないのなら、せめてメールにしる着信にしるないかを確認したい。

デジタル時計は、正午ちょうどをさしている。受信メールも着信もない。

圏外だった。

「う、動くなっ！」

やかましい。もしかしたらガードマンかもしれない。であれば雷太は怪しまれていることになり、どうにも本意ではなかった。

「あの、すみません。さっきの地震のこと、詳しく聞きたいんです

けど」

「黙れっ！」

とりつく島もない。歓迎されていないのは明らかなので、とりあえず外に出ることにした。ここがどこかはわからないが、人間の足だ。そう遠くないはずだった。

「動くなと言っているっ！」

うるさい。

雷太が無視して踵を返すと、おもむろに背後に立っていた兵士が動いた。

「っ！？」

かわせたのは奇跡と言うほかない。一直線に突かれてきた槍は、ややもすれば腹部を貫きかねなかった。

恐ろしいことに、本気で殺すつもりようだ。

「あ、頭イカレてんのか！」

詰め襟がわずかに切れている。この槍、もしや本物が。戸惑う雷太に、続けて兵士が槍を突いてきた。

これもかわす。損なえば死ぬと思うと、刃物を前におびえる余裕もない。

「ち、ちくしょうっ！」

思わず脇をかすめた槍の、柄の部分を掴む。兵士は槍を戻そうと

引つ張ったが、それでは困る。思い切り力を込めて、右手で引き抜いた。

「うおっ」

と兵士はうめいて、予想以上に簡単に槍を手放す。やはり格好だけで力はないようだ。槍も張りぼてのように軽い。先だけ研いでいるのだろうか。

「警察呼ぶぞこの野郎！」

刑法第203条、殺人の未遂は罰するのだ。

しかし兵士たちは変わらず槍を構えている。心なしか、だんだんと包囲を狭めてきているようだ。

携帯電話をしまい、雷太は兵士を見回した。

「見た目に騙されるなっ！ 馬鹿力だぞ！」

「武器を奪われた、油断するな！」

なんだこいつら。本格的におかしい。

と、そのとき、門扉が音を立ててゆっくりと開いた。

こんな巨大な門がどのようにすれば開くのか。機械式だろうか。

雷太が見とれていると、わずかに開いたところで音は止み、その隙間に壮年の男が立っていた。

「御前ぞ。なにを騒いでおるか！」

その男は……短い白髪に顔の下半分を覆う白髭。いかめしい皺の寄った顔のごつい騎士であった。騎士、というのはいさげ好

をしているという意味だ。

「ウ、ウラバネス騎士将軍！ くせ者にございます！」
「なんだと」

コスプレ一味の中でも、ずいぶん偉そうだ。しかし騎士将軍とは、また奇妙な階級である。

ここにきて、雷太の思考はまた動き始めた。なんだかこいつら、ふざけているようにもイカれているようにも見えぬ。いや、イカれているのは確かはずだが……

「小童ではないか。ひっ捕らえろ」

「し、しかし尋常ではない力で、もしや魔族ではないかと」
「ひっ捕らえろ！」

一喝。大砲が鳴ったかのような一声であった。雷太は思わず怯んだが、兵士たちは奮い立ったようで、

「うおおっ！」

と叫び、一斉に突進してきた！

雷太の心中に絶望の二文字が浮かぶ。逃げ場はない。いや、先ほど得物を奪った兵士のいる方は、ほかに比べて幾分か安全だ。だがその兵士の後ろからも新たに湧いてきている。突破したところで状況は変わらない。

しかしこのままでは死んでしまっではないか！

手の槍をどうにか使っしかなかった。軽すぎて頼りないが、ない

よりマシのような気がする。

どこに行くべきかと考えると、やはり無手の兵士しかなかった。

ほとんど一瞬で決断すると、雷太は床を蹴った。

雷太のいたところを槍衾が襲う。

無手の兵士は驚愕したように目を剥いていた。雷太は姿勢を低くして、右肩から思い切りぶつかる。確かな手応え。これで兵士は吹っ飛び、とりあえずの安全が……

本来なら雷太は逃げるべきであった。兵士たちも追うべきであった。誰もそれをしなかった。

雷太にショルダータックルを食らわされた兵士が、浮いていた。いや正しくない。正確には、大きな弧を描いて吹っ飛んでいる！

誰も見とれた。駆けつけてきていた新手の頭上を越し、がしゃん、と墜落する兵士。

「……あ、あれ？」

雷太が一番、状況をはかりかねていた。

「や、やはり魔族か！ 化け物め！」

騒ぎ立てる兵士たち。

「魔法士を呼べ！」

「今来ている！」

意味が分からぬ。しかし、意味が分からぬまま死んでしまうのはもったごめんだ。

構えたことなどないが、雷太は槍を両手に、どうにか格好を付けてみた。これで相手が力量を勘違いし、見逃してはくれないだろうか。そう、先ほど騎士将軍と呼ばれたそのオッサンだ。

しかし、騎士将軍の顔は変わらぬ。いかめしい面で雷太を見据えたままである。

「槍は素人だ、かかれっ！」

一瞬にして見抜かれた。壁を背に立つと、自分を囲もつと十を越える兵士が突つかかってくる。

これはまずい。本気で死ぬかもしれない。

逃げるところが今度こそない。このままでは無数の槍が、いともたやすく彼の命を奪う。

式家麻尋が頭に浮かんだ。なぜこのときに、家族よりも先に麻尋が浮かぶのか。その意味を深く考えようとせず、雷太はやぶれかぶれ、手の槍を思い切り振り、どうにかなることを祈った。

突風が巻き起こった。

危うく体が浮きそうなほどの風だった。台風でもこれほどの強風の経験はない。というか、今は台風のたの字もない。いったいどこから吹き込んできたのか。

兵士たちが悲鳴を上げて、吹き飛んだ。

「う、うお……」

と申いたのは雷太である。見ようによっては、自分の一振りが風を起こしたかのように見える。

自分の回りを吹きすさぶ強風が敵を飛ばした。

なんだこれは。

兵士たちに囲まれているにも関わらず、雷太は壁や床を見た。風の入り込むような穴はない。ではこの、自分を守るように包み込む風はなんだ。

「魔法士、到着！」

「束縛しろ！」

号令。雷太は注意を戻す。いつの間にか右手のほう、扉の近くに、フード付きのローブを着た人間が一人立っている。

男が腕を前につきだし、指を何かをなぞるように動かすと……その軌跡に光の線が生まれる。

危険だ。その技術がいかなるものか見当もつかなかったが、束縛しろとの命令をつけてのものだ。ろくなことにならないはずだ。

しかしなにがおこるかわからないのに、対処のしようがあるのか？

何でもいい、どうにかしろ。自分で自分を奮い立たせる。さきほど、風が兵士たちを蹴散らしたのを思い出す。

届くか。

ほかに手段はない。雷太は構えた槍を、すでに何らかの図形を描きつつある男に向かってつきだした。届かぬのは当たり前だ。だが、

兵士たちは届かぬ槍から巻き起こった風に舞った。

「届け！」

叫んだ。そうすれば届くと信じた。

だが、

「ラウブ！」

と男が叫び、描かれた凶形から光の筋が走る！

風が起きていない。いや、相も変わらず雷太の回りは暴風だが、相手まで届いていない。

光の筋は一直線に雷太まで飛んできて、四つに別れた。両手、両足に巻き付く。

熱さを感じた。これだけ発行していれば熱もすごそうだった。しかし感じたのは熱ではなく、極端な重さ。

重力がとたんに増したようだった。

悲鳴を上げた雷太は、四つん這いになって伏せる。この腕を、足を縛る光輪が元凶のようだった。

「ど、どうしてこんなことに……！」

あくまでも話し合いで解決すべきだったのだろうか。いや、有無をいわず殺そうとしたのは向こうだ。

いやいやいや、もっと根本的な問題がある。

これはなんだ？

この兵士たちも、手の槍も、風も、光輪も、およそ現実とは思えぬ。

自分にいったいなにが起きた。

あの地震の後、いったいなにが起きた？

「捕らえました！」

すぐ近くで、兵士の声が上がった。

重さに苦しみながら顔を上げると、五つの槍が、首筋を狙って光っていた。

死ぬ。これは間違いなく死んでしまう。

光る刃は本物のそれだ。

この連中は……興奮したように見下ろしてくる兵士たちは……本気だ。なんの冗談でもない、本気の兵士たちだ。日本にこんな前時代的な場所があるというのか。

靴音が鳴った。

気がつけば、雷太がまとった風の他にはその音しかしなくなっている。兵士たちは静まりかえり、雷太の命を狙っている五つの槍の持ち主も、口を一文字に引き結んで動かない。緊張しているようだ。

「槍を引け」

「は、はっ！」

重苦しい声が発せられた。

満足に見上げることでもできぬ。雷太がうなだれると、そのとたんに髪を捕まれ、強引に引き上げられた。

間近にムサイ顔がある。騎士將軍と呼ばれた、壮年の男。

近くで見るとなお恐ろしい。なんの甘さも見えない冷徹な瞳が、雷太を見据えている。

「ここまで入り込んだのは褒めてやろう。ずいぶん腕だな。しかし、開戦間近とはいえそれを許す我らではない」

「……な、なんのことだか」

「いい度胸だ。後でゆっくり調べたいところだが、お前のその力、危険だな」

腰から物々しい剣を引き抜く。

「お待ちください、騎士將軍殿」

別の声が聞こえた。若い。目だけで声の方を見ると、先ほど雷太に不可思議な術をかけた、ローブの男だ。

「魔族ですぞ。殺しては不戦の大約定が」

「先に仕掛けてきたのはあちらだろう」

「しかし魔族は約定締結後、シバから一人たりとも出てきておりません。理屈に合いません」

「見つからないからこそここまで入り込めたのだろう。危険なことに変わりなし」

「先に確認をとってからでもよいでしょう。ご心配とあらば眠らせていてもよい」

「魔法でか。魔族にそれが効くのか」

「今くせ者を拘束しているのは私の光輪ではありませんか」

話している内容はさっぱりだが、雷太は若者を応援した。どうやら殺さないように説得しているようだ。

「もしや、この男、自ら話すやもしれませぬ。魔法を封じてみましよう」

騎士將軍は鼻を鳴らすと、剣を雷太の首に当てた。同時に若者が何事かをつぶやき始め、先ほどと同じように指先で空中に図形を描

く。

「貴様、シバからのものだな」

シバ、とはどこだろう。近くにそれらしき地名はない。

「ち、違います……神奈川の太江崎市の」

「カナガワ？」

「こ、ここ、神奈川じゃないんですか。い、いや、どこなんだ、こ
こ」

「貴様が問われておるのだ」

と言い、騎士將軍はにらみつけてくる。

だがそれ以上の追求はない。しばらく黙ったまま睨まれ、雷太は身震いする。なにをたくらんでいるのだ。

「貴様、自分が忍び込んだ場所もわからぬというのか」

ギリリと刃が光った。

「……お、お待ちください騎士將軍、魔法ではありませんぬ」

それは雷太の決断と同じだった。

若者の慌てた声に、ほんのわずか、騎士將軍の注意がそれた。

この時を逃しては他にない、四肢の光輪は彼の動きをほとんど制限していたが、それも構わぬ。

死んでたまるか！

「死んでたまるか！」

心と口で同時に叫ぶと、雷太は全身に力を込めた。こんな小さな両輪で縛れるものか。ただ重いだけのはずだ。にわかに、彼のまとつていた風が強まった。理屈ではなく、雷太は直感する。この風は雷太の思考とシンクロしている。彼の意のままに動くのではないか。

彼は信じた。信じるしか道はなかった。

目の前の騎士將軍にむけ、精一杯の意思表示を行う。

襲え！

「むっ」

雷太の叫びに顔を戻した騎士將軍が、巨大な見えないハンマーで横殴りにされたかのようによろけた。事実、それほどの突風が騎士將軍を襲ったのだ。

うめきながら、しかしなんとということだろうか。騎士將軍は腰を深く落とし、雷太の髪の毛を掴んだまま踏ん張っているではないか！

「小童めがっ」

だが右手は風にあおられ、持っていた剣は弾き飛ばされている。小規模な嵐の中、空になった掌で、雷太の顔を鷲掴みにした。

万力で締め付けられるような激痛。

後悔する。風は期待通りの威力を発揮したが、この男、人外のこ

とき瞥力だ。車でも飛びかねぬ風速のはずが、なぜ腰を落とすだけで耐えられるのだ。

「貴様が死ぬか俺が手を離すか、勝負といくか」

騎士將軍は笑わぬ。それどころか、これまでちいとも表情が変わらぬ。雷太の全力を受けてなお、焦りも戸惑いも見られぬ。

雷太は痛感した。勝てない。他の連中とは訳が違う。

同時にあれほど渦巻いていた風が、霧散した。

あれから妙な術を使った若者がさらに制止に入り、騎士將軍は澁々ながら、雷太を牢に放り込むことで妥協した。光輪を四肢だけでなく頭や首や胴にもまかれ、もはや雷太の体は一寸も持ち上がらぬ。だから彼は冷たい石の上で寝ているしかない。

殺されなかったのは不幸中の幸いであった。あれほど暴れた上でなお温情を求めてくれた若者のおかげだ。若者と言っても、雷太より一回りは老けているが。

しかし先はない。

死という処罰が少し長引いただけの話だ。

どれくらい仰向けになっていただろうか。尿意を感じないのだからそれほど長くあるまい。その間に、雷太は悪足掻きのように思考を回転させた。それしかできなかった。

わずか五分足らずに起きたことが、常軌を逸していた。流れのまま暴れ回ったのは確かだった。だが正直な話、雷太にそこまでの力量がないのは明白だ。

ここはどこだ。

自分になにが起きた。

地震のあとになにが起きた。

繰り返し繰り返し自問するが、答えなど出るはずもない。なにせ、地震でつぶれてしまった骸の見る夢か、そうでなくなつてなにかのショックで気絶している間の夢であるという結論が一番ありそうである。妄想妄想。だがこんなにも痛みを感じる妄想などあるのだろうか。

いつの間にもやら、雷太を風が覆っていた。

この風はなんだろうか。突如としてあらわれた風。

雷太を守るように包み込み、ある程度意のままに動かせる風。

目を閉じると、どこか見晴らしのよい草原に立っているように感じられた。

頬をなで髪を揺らし、耳に囁く。それが程良い気持ちよさで……

「お目覚めください」

ふと、目の前で声がした。

驚いた雷太が目を開けると、見慣れた景色が目に入る。

座り心地のよいソファ。テーブルに開かれた赤本やノート。湯気を立てているコーヒー。鼻をくすぐる煙の臭い。視界の隅に観葉植

物。洒落た洋楽の流れるここは……カフェ・ボヘミアンだ。外は車が走り、通りの向こうには住宅街が広がっている。

雷太はため息をついた。同時に胸をなで下ろす。よかった。やはり夢だったか。

おそらく地震の衝撃で気絶してしまったのだろう。その間にみた、キテレツな夢。当たり前だ、あるわけがない。

しかし雷太の頭は、すぐに逃避をやめた。わかっている。この声は恭平のものではない。

つい先ほど聞いた。雷太を拘束した光輪、それを生み出した若者。恭平のいた、向かいの席に座っている。

「あなたに危害を加えるつもりはない……とはいえ、あなたの力は危険なのも事実。そのため、失礼ながら頭の中に入り込ませていただきます。先にお詫びします」

フードをとると、淡い紫色の髪の毛が流れた。平たい顔で、目は細い。右耳にピアスのような物が三つついている。

「ドット・ネスコンと言います」

雷太は安易に答ええない。危害を加えるつもりがないとは言いが、信用しろと言う方が無理だ。それに頭の中だと？

「先にあなたの意志を伺いたい。いかなる目的で王城に入り込んだのか」

雷太が黙っていると、ドットは回りを見渡して、

「ここはあなたの記憶にある風景です。様式はともかく、見たことのないものだらけ。正直なところ戸惑っているのです。あなたが何者か。とにかく、魔族ではなさそうだ」

魔族。兵士たちも言っていた。それは彼のよく知るところのモンスターだと考えてよいものか。

「私はあなたを見極めるためにわずかの時間を与えられた。このままではあなたは死罪になる。悪意がないのであれば、お聞かせください」

「さつきから聞いてれば」

雷太はため息をつく。

「意味の分からないことだらけだ」

「立場をご理解いただきたい。あなたはシュミット王城に侵入し、衛兵らを傷つけた。昨今は物騒になってきている。中には王を狙うとのことだと主張する者もいる」

「理解できないから答えようがない。俺はただの高校生で、シュミットなんて国は聞いたこともない。さつき相手にした兵士は、俺を殺そうとしたから自分を守っただけだ」

言いながら、それが無意味な主張であることはわかっていた。ドットという男が自分をからかっているのだから……ここは、今までの常識が通用しない別世界だ。

普段であれば笑いとばすところだった。日本語を話しているのに、ここが日本でないと言う。

しかし、先ほどの数分間で起きたことを考えると……

「なにが起きたかわからない。俺の方こそ説明してほしいくらいなんだ。ここはどこで、あんたたちは何者で、どうすれば帰れるのか」「そう、問題はそこです。私は少なくとも、あなたは魔族ではないかと思っただ。だからシバに連絡をとり、あなたと話す時間を請うたですが今、驚きを隠せないでいる。あなたは魔族ではないし、この景色だけでも、私の理解の範疇外にある……ですから、知りたいのです。あなたがどこから来たのか」

「頭の中に入って記憶を映し出せるなら、説明なんかいらんじやないか」

「できないことはない。しかし記憶を覗かれることを好む者はいない。あなたを力で蹂躪しないという、その証明だと思っただきたいのです」

表情は変わらぬ。だが雷太は再びため息をつく。冷静になれと自分に言い聞かせる。このままでは状況は変わらない。変わらなければ死罪。どう変わるにしろ、これ以上悪くはならない。

「見てくれ。話すより早いし、伝えるなら余計な疑問は残らないようにしたい」

「よろしいのですか」

「でも、理解できるかどうかは保証しない」

ドットは手を組んで、身を乗り出した。

「ありがとうございます」

「全部見てほしい。俺の記憶の隅から隅まで」

「はい」

黙り込むと、ドットはただでさえ細い目を完全に閉じる。耳の飾りが鳴った。

「……これは」

しばしの瞑目のあと、ドットの額に汗が浮かぶ。

「なんとも……信じがたい」

雷太は黙ったまま、ドットを見ている。

「これがあなたの生きる世界ですか」

「信じるのか」

「頭を覗く、とはそういうことです。記憶は嘘をつかない」

「なにかわかったか」

「あなたの記憶がおかしくなっていないのであれば、嘘をついていないことがわかりました。しかし一つ、腑に落ちぬ点がある」

ドットは目を開くと、

「あなたは高校生という身分。まともな訓練も受けていないし、先ほど見せたような力も持たない。どういうことでしょうか」

「わからない」

「そうでしょうね。人並みはずれた力も、風を操る力も、あなたが王城に『現れる』まではなかった。いや、あなたが『現れる』直前に起きた異変によって覚醒したと考えたらどうです」

「どうといても、それはフィクションの話だ」

「しかし私は魔法を使える」

「俺の常識では、それはやっぱりフィクションだ」

「そう、ですね。むしろ、あなたがヴェリーペアに来たが故に発現したと考える方がよいかもしれません。いえ、申し訳ありません。

あなたのことはよくわかりました。どこまで理解できているかはわ

かりませんが」

「それで、俺はどうなる」

「やはり一つの問題があります。あなたの無実はわかりましたが、同時にあなたが宮中で争いを起こしたのも事実。そして、私が説明したとして、他の者を納得させることができるかどうか」

「全員に俺の記憶を見せてもいい」

「無理です。これは魔法によるものですが、宮中では私しか使えない。他の者では見る事ができない」

三度、ため息。

それでは見せた意味がない。いや、それも半ばわかっていたことだ。騎士将軍と呼ばれた男はドットほどに優しくはなさそうだった。こんな便利な方法があるのにわざわざ問いかけて来たのは、それが使えないからだ。そして厄介なのは、記憶が嘘をつかないとはいえ、それは見たものにはわからない。

この男はただ一人、この魔法が使えるという。ずいぶんと偉そうだった騎士将軍にも申し、雷太を取り調べているのだから見た目に寄らず権力はあるのだろう。だからといって、雷太の現状を考えるに、それだけで押し通せるかといえば、否である。

雷太が今いる世界を信じられないのと同様に、異なる世界から迷い込んだという主張もまた、信じられないのだ。

「なにか方法はないか。帰りたいんだ」

「私に考えがあることはあります。しかし、もしかするとあなたの立場を危うくしてしまうかもしれない」

「わかった。話してくれ。ただその前に質問したい」

「なんでしよう」

「俺がその、魔族でないならもういいだろ。さっきからどうも、協

力的だけど。理由は？」

「単純な知識欲、と申し上げてよいですか。いや、これは欺瞞ですね。私も嘘はつかない。私はあなたを利用しようとしている。そのためには死なねたら困るのです」

「利用価値が俺にあるのか」

「あります。あなたが風の力を持っていてよかった」

雷太の囚われた牢の前に数人の男女が現れた。ドットの姿もある。特に目立つのは、純白の衣に身を包み、豪華な杖で体を支えている老齢の男。おそらく昨日、ドットが言っていた大司オルテッド・ベンガラ。この国の宗教家のトップだ。

その脇に立つのが、銀色の甲冑に綺麗なブロンドが映える女性。若い。ドットの予想通りなら、穿天將軍フラウス・ホワイト。騎士將軍に次ぐ軍事のエキスパート。

雷太は立ち上がった。冷や汗が背中を濡らす。

一世一代の大芝居が始まる。

「大司。この者でございます」

禿げた頭をさすりながら、

「……ふむ」

雷太を覆う風を見つめている。フラウスはベンガラから一歩踏みだし、

「戒めはどうなされた」

「必要もありますまい。この者は我々に危害を加える意志はない」
「しかし」

「よいよ、ホワイト殿。あのネスコンが命を懸けておるのだから、尊重してやらんと。もし腹に一物あるのであれば、私がこの部屋に入ったときすでに命はなかるうて」

「……は」

不服そうに引き下がるフラウスを後目に、今度は長い髭をいじり出すベンガラ。

「宮廷魔法士筆頭ドット・ネスコンが乗り込んできたときは何事かと思ったが……なるほど、この目で見ると確かに。長生きはするものよ」

「はい、風の精霊ウイン・ベネットの顕現でございます」

始まる。

「ウイン・ベネット？」

「はい。もちろんあなたの世界には存在しない言葉ですが、創世神話に登場する名前です。この地をお作りになったアフルエント。そのしもべとして生み出されたのが地水火風の精霊。地のエイシアン・ト・クロム。水のアクア・ラシエル。火のフレイ・ラシエル。そして風のウイン・ベネット」

雷太は首を傾げた。違和感。

「そしてシュミットはウイン・ベネットを主霊として信仰している。風の守人、轟天大聖、呼び名は様々ですが。そう、風はこの国では聖なる物なのですよ。敬虔な信徒にとっては」

「……だから俺は都合がいいのか」

「そうです。あなたの力は魔法ではない。しかし人では魔法は起こ

せません。であれば、霊域のものだという結論になる。宗教を味方につけます」

しかし、雷太は思う。そこまで簡単に行くものだろうか。

「近いうちに……早ければ明日、大司ベンガラ様に話をつけましょう。あなたを連れ出す訳にはいきませんから、どうにか大司にお越しただくよう願ってみます。そこであなたの力を見せてほしい」

「その大司ってのは？」

「聖ウィンドラム教の最高位に与えられる聖位です。宗教における最高権力者だと考えていただいで結構です」

これまた、ずいぶんと大物の名前が出たようだ。雷太はウィンドラムという言葉にひっかかりながらも、先を促す。

「その大司が、帰り方を知っている？」

「いえ、知らないでしょう。ですからまず、あなたが生きながらえるための方策です。あなたをウィン・ベネット本人、そうでなくとも眷属であると認めていただきます。となれば王とて騎士將軍とて、あなたを死罪にすることは難しい」

今度は、彼は頭を抱えた。

ドット・ネスコンは途方もなく大胆な話を持ちかけているのだ、と気づいたからだ。

「待て待て、待って。俺が神になりすますって？」

「神ではありません。精霊か、眷属」

「崇拜の対象なのは間違いないだろ。そんなこと、誰が信じるんだ」

元の世界で神を自称する人間がどのように受け止められているか

を考えると、とても賢い作戦だとは思えない。

「ですから、あなたの風の力です」

「魔法でも風くらい起こせるんだろ？」

「ええ。ですが人間が魔法を使うためには、紋章と詠唱が必要です。魔族であれば無詠唱で使えますが、それでも隠せないのが魔力の蒸散」

ドット・ネスコンの説明によればこうである。

魔法を使うための大前提として、魔力を体から放出する必要がある。もともと精霊の技術であると伝えられるところの魔法は、人間が扱うために紋章と詠唱の補助が必要となる。これには生まれつきの才能が必要であり、そのため魔法を使える者は非常に限られている。精霊と人間が遙か昔に子をなし、その末裔に当たる魔族は、精霊の血により紋章と詠唱は不要だ。だがやはり、魔力を放出せねばならぬ。

この魔力の放出は、魔法を使える者ならば視認することができる。

「というより魔力の視認により、魔法の才能の有無がわかるという順番ですね。そしてあなたのその力、魔力の蒸散が見られません。そもそも常に魔法を発動し続けていれば、すぐに魔力はすっからかんになってしまうすし」

風間雷太の力が魔法によるものではない。

それを大司ベンガラに見せる。

「待て、やっぱり問題があるぞ。魔法は精霊の物。扱うには魔力が必要。それなら、魔力を使わない俺の力がイコール精霊の力になる

のはおかしくないか」

「ええ、もちろん。ですからこれは賭ですね。大司がどのように解釈されるか」

なんだと。

必要な訓練は打ち合わせの後、試した。

現状、ドット・ネスコンは雷太の身の上を知る唯一の人間だった。しかも協力的だ。権力者でもある。このツテを利用しない手はない。

だがそれには、さらに権力を持つもの……彼を処罰したがっているウラバネス騎士將軍を超える権力を持つ者の力も欠かせない。

それが聖ウインドラム教大司ベンガラ。彼の前で穏やかに笑っている老人である。

「無礼を承知でお尋ね申す。こちらのドットがいうに、轟天大聖であるとのこと。矮小なる身であれどウインドラム教の大司を努めます故、失敗の許されぬ立場であるのご理解いただきとうございます。それほどの事態にござりますれば」

「構わん」

ドットの助言によると、ある程度は尊大にふるまった方がよい。そしてそれとは逆に、風の勢いは強く。いらだちを見せるように強すぎてはいけない。一晚練習したとはいえ、まだ自由に操ることとはできぬ。

「大地より去りて長い」

ベンガラから目を背けてはいけない。が、これがまことに難しい。

表面上低姿勢ではあるが、ベンガラの表情からは畏敬のかけらも見えぬ。見透かされているようであり、どこをつっこまれるか気が気でない。

「しかし……確かに、纏いし風に魔力は見られぬ。いや失敬、畏れながらも轟天大聖のお力を賜っている我ら人間が、魔法を使うために必要なもの。たしかに人間や魔族がたばかっているのであれば魔力が見えるがゆえに、魔法だとわかる」

ぐ、と雷太は息詰まる。信仰の対象たる精霊に、こんな説明じみた言葉など不敬の極みだ。ドットの表情は読めないが、先行きが暗い。

「しかし轟天大聖の力には魔力は不要なのでしょうか」

「大司ベンガラ、お前はなにもわかっておらん。私は私自身が風であり、空であり雷。愚弄するならば我が信奉者として容赦はせんぞ」
「は、とんだご無礼を」

うやむやにする、もしくは魔力が魔族や人間の常識であることを逆手にとる。これが精一杯の対抗策である。しかしあまり有効には見えない。

「しかし私も人の子。轟天大聖に仕える身ながら、我がシュミットの反映に尽力せねばならぬのも事実。申し訳ありませんが、我が一存でお出しすることはいたしかねます。国王と協議させていただきますとうございますれば、しばしの時をいただきたい」

しまった、逃げられる。無礼千万の物言いだが雷太にはどうすることもできぬ。多少風を強くし、表情で不快を訴えるのが精一杯だ。本物のウィン・ベネットであれば気にくわない相手を殺しもしようが、彼にとってはベンガラの不興を買うと先がない。

「私なんのために降りたかよく考えるといい。人の繁栄は我らの望み。その点では、ベンガラ、お前の慎重な判断はウィンドラムの大司にふさわしい」
「恐悦至極にございます」

どうせ皮肉も通用せぬだろう。一礼して去るベンガラを、雷太は苦虫を噛み潰したような顔で見送る。

これで終わりか。

なにもできることはないか。

考えても、そもそもウィン・ベネットでないのだ。

心中に式家麻尋の顔が浮かぶ。こんな事態に陥るのであれば、せめて好意を伝えるくらいしてもよかっただろう。

そして、次の日。

衛兵につれられ、彼は牢を出た。

馬車から降り枷をつけられたまま歩く。ここはどこだろう。見晴らしのよい丘の上、見渡せば広大な街が見える。向こうに城が見え、彼はそこから連れてこられたのに相違ない。

この衛兵たちをノして逃げることはたやすいだろうが、それでは問題は解決しない。追っ手を振りきらねばならないだろうし、騎士将軍が出張ってくれば一巻の終わりだ。

目の前の巨大な建物は、やはり巨大なステンドグラスがよく栄えた。清潔な白い塗装。教会のような雰囲気がある。

「お待ちしておりました、カザマ様」

扉が開き、ドット・ネスコンが歩いてくる。

「さ、さ。大司に……おお、なにをしているのですか。この方の戒めをすぐに解きなさい」

衛兵たちにきびきびと指図するドット。

雷太は惚けたように、手かせを外す衛兵の手をみやる。

「どうぞこちらへ。カザマ様。いや、これからは轟天大聖とお呼びした方がよろしいでしょうか」

「あ、あの……処刑、ですよね」

「なにをおっしゃる」

ドットは薄い目を見開いて、

「大司のお口添えで釈放ですよ。聞いておりませんか」
「はあ？」

意味が分からぬ。まさかベンガラが、本気で雷太のことをウィンだと思っているわけではない。

「いやはや、私もどうなるかと思っていたんですが」

前を歩くドットは心なしか嬉しそうだ。中は以外と質素な建物で、木造のドアを開けて中に入る。

ギクリ、と雷太の体が硬直した。そこにいた老人こそ、昨日のベンガラであった。隣にはフラウスもいる。

「お連れしました、大司」

「おお、来なすったか。まあお座りください」

考えることを放棄した雷太は、なすがままにテーブルについた。大司の胸の内が聞けるのだろうか。

「フラウス殿。もう警備は不要と申し上げましたのに」

「万が一のことです。他意はありません」

「左様ですか。ですがここは密室。なにがあっても他言無用に願いまするぞ」

「私は大司の身をお守りするのみです」

ドットの説明を思い出す。王は教会の祝福を受けて民草の指示を得る。そのため、教会の頭である大司ベンガラは、国の法の外にあり、唯一、王の命令に従わなくともよい立場にある。

もちろん王の政治が人民を栄えさせる限り、大司は王に面と向か

って逆らいはしない。だがたとえ將軍といえど、ベンガラには従わねばならぬ。露骨にふるうことは許されぬが、なみなみならぬ権力を持っているのだ。

「よろしい。ではドット、轟天大聖殿にご説明を差し上げようではないか」

やはりベンガラは、雷太のことをウインとは思っていなかった。そうでなければ「殿」などつけるはずがない。

「まず貴殿、どちらからいらっしゃった」

「……大門扉の先より」

「私は真実を求めておる」

目の端でドットを見た。彼は小さく頷くと、

「この国で大司の命に逆らうのは、王に逆らうのと同じです」

そんな相手に嘘をつけと言ったのか。

しかしドットがそういうなら、洗いざらい話さざるを得ない。というより、この様子だとすでにドットから真実が伝えられている可能性が高い。

「……この世界とは全く違うところですよ」

「北の果て、という意味ですか」

「そんなレベルじゃない。空の先、といった方が想像しやすいと思います」

「愚弄するか」

鋭い一言は、フラウス・ホワイトからのものだった。

「フラウス殿。あなたは私の警護でしょう」
「し、しかしこの繰り言に……申し訳ありません」
「では、貴殿のいたところはなんというところか」
「日本という国の、神奈川」
「なぜ、我が国に」
「迷い込んで」
「いかにして」
「わかりません。気づいたら、いました」

ベンガラはふむ、と呟いて、

「では、風の力はいかにして」
「わかりません。兵士たちに襲われ、そのときからです」
「……し、しばし」

フラウスが立ち上がった。三人が目を向けると、美しい顔をしかめている。

「フラウス殿、お控えなさい」
「いいえっ！ ベンガラ様、聞いていればこの男、ご、轟天大聖では……」
「お黙りなさい」

ぴしゃりと言いつけられ、フラウスは蒼白のまま立ち尽くした。その様子を見るに彼女はなにも知らなかったようだ。

「よろしい。ご存じのように、貴殿は釈放となった。しかし私は、貴殿を轟天大聖と信じているわけではない」

フラウスの顔が苦渋に染まる。

「しかし、私は王に申し上げた。貴殿こそ轟天大聖、風のウィン・ベネットの顕現であると」

そして、雷太にもそろそろ事態が掴めてきた。

「この意味がおわかりですか」

よつするに、

「……なれと、そうおっしゃるんですね。昨日あなたにしたように、ウィン・ベネットを演じろと」

「いかにも。確かに風体は怪しい。しかし風の力が魔法に依るものでないのも、またそうなのです。考えようによっては、あなたはウィン・ベネットの顕現と言えなくもない。異なる世界力ナガワが、実は我らが精霊界と呼ぶところかも知れぬ」

「渡りに船です。生きながらえるならなんでもしましょう。しかし、これはドット・ネスコンにも尋ねたのですが……それをして、あなたの方に対してどんなメリットがあるんですか。親切心と言われて受け入れられるような問題じゃなさそうだ」

すると老人ベンガラは、

「知っても知らなくとも、これから貴殿の処遇は変わらぬ。なにもしらないまま、私どもにおまかせいただくことも可能です。なに、危険はありません」

「それじゃ気がすまない。教えてください」

「ふむ……それでは、フラウス殿。発言を許可しましょう。この方に情勢をお伝え願いたい」

「……これ以上私に辱めをと。こ、この得体の知れないくせ者に」
「ここに同席する必要はないと申し上げましたが」

ぐ、と息詰まるフラウス。真面目なのが裏目に出てしまった形だ。国辱とも取れるやりとりが目の前でなされている。

「……いくさが始まる。大きないくさだ。おそらく、大陸すべてを巻き込むものになるだろう。我がシュミットは小国。隣国から攻められれば、勝てぬ訳ではないが被害は小さくない。国の疲弊を憂い、文官の中には大国への追従を叫ぶ一派もある」

その続きを聞きながら、雷太の頭の中で次々とパズルが組み上がっていった。

大国に飲み込まれれば、現在の王室が排斥され、また国教たる聖ウィンドラム教が違うものにとって変わられる可能性もある。シュミットの国としての主権は崩壊し、一地方になってしまう。抗戦派の主張は、王家の断絶と宗教によるものだ。

しかし国力が乏しいのも事実。物量で勝てぬのであれば、国民を説得するための大儀が必要である。

それが風間雷太、いや彼扮するウィン・ベネットの顕現。

轟天大聖が降りてきて、なおかつ自分たちの味方をするとなれば正義のいくさだ。聖ウィンドラム教の信者がほぼすべてを占めるシュミットでこれは大きい。

精神的支柱を得て、志気は嫌がおうにも上がるはずである。

「そのためのマスコットになれば、ってことか……」

「風の力、そして大司のお力があれば、国民たちは……いや、王も

あなたをウインだと信じるでしょう」

とドット。そういえば彼が雷太に協力すると言ったとき、自分の利益をおわせていた。彼をウインに祭り上げることで、相対的に地位の向上を狙っていたとすれば、どうだ。

「俺が、この国を戦争にやるための理由になる、のか」

自分の命がかかっている。それは重々承知だが、雷太の胸に渦巻く嫌な感情。

戦争に対しての、忌避の感情だ。

彼らの言い分はわかる。主権を失った国がどうなるのかは歴史が教えてくれる。だが戦争になれば人が死ぬ。そのトリガーになれと言われているのだ。

命と引き替えに……

「すでに貴殿が轟天大聖だと、王に申し上げました」

ベンガラの言葉は、まるで雷太の心を見透かしてのもののようにだった。

「選択など、もうできません」

「しかしっ！ それでは大司も、わ、私も、王をた、たばかったことに」

「フラウス殿。あなたはどの道が一番よいか、よくおわかりのはずだ」

「他に、他に手はなかったのですか。よりもよってこんな」

「轟天大聖の降臨よりもいい案があったなら教えていただきたい」
「……み、見損ないました」

「結構。しかし初めに申し上げたとおり、他言無用に願いますぞ。あなたは私の意向に逆らい、ここにいるのですから」

「わ、わかっております。私は大司の監視ではない。それに、今となつては私も同罪。かくなる上は自ら命を絶ち、不義を償うしかありませんまい」

「よしなさい、あなたがこんな時に死んではシュミット正規軍が崩壊してしまいます」

「しかし、しかし……」

悔しがるフラウス・ホワイト。しかし雷太も人事ではなかった。

紆余曲折があつたとはいえ、生き延びることはできた。しかしながら、これですむはずは無いのだ。

「まだ、俺があなた方を裏切つて逃げるという可能性がある」

「そうであればさつきそうしていきましょう。とはいえ、心変わりがあるやもしれませぬ。保険はかけておきたい。あなたを縛る物がほしい」

「なんでも結構です。俺としても、それで命が保証されるのなら」

「よろしい。では命をかけてもらいましょう」

ベンガラの説明は、雷太の気をさらに重くさせるものだった。

しかし、最低と言うほどではない。仕方がないとあきらめられる範疇である。

「わかりました。すぐにかけてください」

フラウスに向かって、

「これで嫌でもウインにならなきゃいけなくなりました」

フラウスは無言のまま、雷太を見ている。

そしてこの日、風間雷太はウイン・ベネットを名乗ることになった。

松風涼一が現れる、三週間ほど前のことだ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家なるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0161y/>

戦乱学級 ~ヴェリーペア戦記~

2011年11月22日23時55分発行